

甲斐市文化財調査報告 第19集
(山 梨 県)

松 ノ 尾 遺 跡 14

宅地造成工事に伴う

古墳時代・平安時代の発掘調査報告書

2012

甲 斐 市 教 育 委 員 会

甲斐市文化財調査報告 第19集
(山 梨 県)

松 ノ 尾 遺 跡 14

宅地造成工事に伴う

古墳時代・平安時代の発掘調査報告書

2012

甲 斐 市 教 育 委 員 会

序 文

平成23年度の甲斐市の埋蔵文化財包蔵地の数は219箇所あります。

今回発掘調査を行いました、松ノ尾遺跡周辺は、甲斐市内でも開発の多い地域と言えます。

近年では、平成17年度に、松ノ尾遺跡の西側に位置する御岳田遺跡第4次調査、平成18年度には、松ノ尾遺跡の南側に位置する末法遺跡第4次調査、また、松ノ尾遺跡内で第13次調査が行われ、古墳時代の住居2軒や土坑20基（時代不明）などが確認されています。

松ノ尾遺跡は、甲斐市の東から西を横断する都市計画街路愛宕町下条線の建設に伴う調査によって発見されたのが始まりです。平成6年10月から翌年の7月にかけて調査が行われ、古墳時代から平安時代にかけての住居のほか、後に県指定有形文化財となる「銅造仏形坐像」2躯が住居内から確認されました。遺跡から仏像が発見されることは、非常にめずらしく、同じ遺跡から2躯出土した例は、全国的にも希少です。

この第1次調査から数えて、今回の宅地造成工事に伴って14回目の発掘調査となり、今回の調査場所は、第1次調査場所から、南におよそ100m離れた場所にあります。

調査区は、およそ300㎡あり、後世の攪乱によって、その1/4が消滅してしまっていました。また幾重にもなる遺構の調査は大変困難を極めました。本書は、その調査成果をまとめたものであり、調査で得られた資料は、後世に伝えると共に調査研究、教育普及の資として多くの皆様に活用いただけるよう、勤めてまいります。

終わりに保坂洋子氏の文化財保護に対する深いご理解のもと調査が実施できましたことに感謝するとともに、ご指導、ご協力をいただきました関係者各位に感謝申し上げます。

2012年3月

甲斐市教育委員会

教育長 河 野 文 彦

例 言

- 1 本書は、山梨県甲斐市大下条地内に所在する松ノ尾遺跡の第14次調査をまとめた発掘調査報告書である。
- 2 本書は、保坂洋子氏による宅地造成工事に先立ち、甲斐市教育委員会が発掘調査を実施した。
- 3 調査経緯
平成21年11月24日から12月1日にかけて行われた試掘・確認調査で遺構・遺物が発見された。
平成22年1月19日から発掘調査を開始し、3月31日に終了した。
平成22年4月1日に発掘調査終了報告書・保管書および遺失物法第4条に伴う発見届を提出した。
平成22年4月より整理分析調査を開始
平成24年3月30日報告書発行
- 4 遺構・遺物の測量においては、国家座標Ⅷ系に基づいて、山梨県公共測量作業規定および同運用基準に定める4級基準点測量に基づく精度により、図面作成を行っている。
- 5 本書の執筆、編集、遺構・遺物の写真撮影は須長が担当した。
- 6 本書にかかわる出土遺物および記録図面、写真などは甲斐市教育委員会で保管している。
- 7 調査組織
調査主体者 甲斐市教育委員会
調査担当者 大寫正之（甲斐市教育委員会 教育部 生涯学習文化課）
須長愛子（甲斐市教育委員会 教育部 生涯学習文化課）
調査事務局 甲斐市教育委員会 教育部 生涯学習文化課
- 8 調査にかかわる費用は、保坂洋子氏が負担した。
- 9 発掘・整理分析調査参加者
飯室久美恵・上野光雄・小林明美・高添美智子・堤吉彦・古屋秀雄・望月典子・森澤篤美・横内博

凡 例

- 1 本書の第1図は国土地理院の地形図を用いて、作成したものである。
- 2 土色、土器の胎土は、小山正忠・竹原秀雄『新版標準土色帖 29版』平成19年発行 日本色研事業株式会社発行のものを参考にした。
- 3 遺物図面の土器断面  は須恵器をあらわす。
- 4 遺物図面の土器断面  は陶器をあらわす。
- 5  は、遺構図面では、炭化物を遺物図面では煤の付着を表す。

本文目次

例言・序文

目次

第1章 遺跡をとりまく環境

第1節 遺跡の場所	1
第2節 遺跡の概要	1

第2章 遺構と遺物

第1節 基本層位	5
第2節 住居跡	5
第3節 溝	23
第4節 堅穴状遺構	25
第5節 土坑	26
第6節 Pit	32
第7節 遺構外遺物	33

第3章 まとめ 36

插图目次

第1図 松ノ尾遺跡と周辺の遺跡	2
第2図 調査区位置図	3
第3図 調査区全体図	4
第4図 基本層位	5
第5図 1号住居跡・出土遺物	6
第6図 2号住居跡	7
第7図 2号住居跡出土遺物	8
第8図 3号住居跡・出土遺物	9
第9図 3号住居跡・出土遺物（1）	10
第10図 3号住居跡・出土遺物（2）	11
第11図 4号住居跡	12
第12図 4号住居跡出土遺物	13
第13図 5号住居跡・出土遺物	13
第14図 5号住居跡出土遺物	14
第15図 1～5号住居跡・出土遺物分布	15
第16図 7・8号住居跡	16

第17図	6号住居跡・出土遺物	17
第18図	9号住居跡	18
第19図	9号住居跡カマド・出土遺物	19
第20図	9号住居跡出土遺物	20
第21図	6・9号住居跡・出土遺物分布	22
第22図	10号住居跡	23
第23図	1号溝	23
第24図	2号溝・出土遺物	24
第25図	竪穴状遺構	25
第26図	1・2号土坑	26
第27図	3・4号土坑	27
第28図	5号土坑・出土遺物	28
第29図	6・7号土坑	29
第30図	8・9号土坑	30
第31図	10号土坑	31
第32図	1～5ピット	32
第33図	遺構外出土遺物（1）	33
第34図	遺構外出土遺物（2）	34

表 目 次

第1表	1号住居跡出土遺物観察表	6
第2表	2号住居跡出土遺物観察表	8
第3表	3号住居跡出土遺物観察表	11
第4表	4号住居跡出土遺物観察表	13
第5表	5号住居跡出土遺物観察表	14
第6表	6号住居跡出土遺物観察表	17
第7表	9号住居跡出土遺物観察表	21
第8表	2号溝出土遺物観察表	24
第9表	5号土坑出土遺物観察表	29
第10表	土坑一覧	31
第11表	遺構外出土遺物観察表	35

図 版 目 次

図版 1 - 1	調査区全景	図版 4 - 2	2号土坑
図版 2 - 1	重複住居	図版 4 - 3	3号土坑
図版 2 - 2	1号住居跡	図版 4 - 4	4号土坑
図版 2 - 3	2号住居跡	図版 4 - 5	5号土坑
図版 2 - 4	2号住居跡 遺物出土状況	図版 4 - 6	6号土坑
図版 2 - 5	3号住居跡	図版 4 - 7	7号土坑
図版 2 - 6	3号住居跡 遺物出土状況	図版 4 - 8	8号土坑
図版 2 - 7	4号住居跡	図版 5 - 1	9号土坑
図版 2 - 8	4号住居跡 遺物出土状況	図版 5 - 2	10号土坑
図版 3 - 1	3・4号住居跡 重複ライン	図版 5 - 3	1号溝
図版 3 - 2	遺物出土状況	図版 5 - 4	2号溝
図版 3 - 3	5号住居跡	図版 5 - 5	2号溝遺物出土状況
図版 3 - 4	5号住居跡 遺物出土状況	図版 5 - 6	ピット群
図版 3 - 5	6号住居跡	図版 6	遺物№. 1・3・4・5・6・7・8・9
図版 3 - 6	7・8号住居跡	図版 7	遺物№. 10・11・12・17・20・21
図版 3 - 7	9号住居跡	図版 8	遺物№. 22・23・25・26・34・36・37
図版 3 - 8	10号住居跡	図版 9	遺物№. 43・45・47・48・53・54・59
図版 4 - 1	1号土坑		

第1章 遺跡をとりまく環境

第1節 遺跡の場所

甲斐市は甲府盆地の西側に位置し、南北に細長い形をしている。平成16年度に敷島町、竜王町、双葉町の3町が合併し甲斐市となった。面積は71.94km²、人口はおよそ7万4千人（平成23年11月1日現在）である。甲斐市は4つの地域的特長を持つ。甲斐市北部は、茅ヶ岳（1704m）や曲岳（1642m）、太刀岡山（1259m）など、標高千数百mを超える山々が点在する山岳エリア。甲斐市の中央部分は茅ヶ岳の火山活動によって形成された台地が広がる茅ヶ岳南麓の丘陵エリア。甲斐市西部は南アルプス鋸岳を源流とする釜無川によって形成された扇状地エリア。甲斐市東部は、甲府市との境を流れる奥秩父山系の金峰山を源とする荒川によって形成された扇状地エリアと4つに分けることができる。甲斐市は、標高が高いところと低いところでは、1400mの差があり、バリエーションに富んだ環境である。

本調査区の松ノ尾遺跡は、甲斐市東部にあり、荒川によって形成された扇状地と中央部に位置する丘陵地との間に形成された微高地にあり、標高はおよそ290mである。

第2節 遺跡の概要

本遺跡は、甲府市との境界を流れる荒川と茅ヶ岳火山によって形成された通称「赤坂・登美台地」との間に位置する。この台地と荒川の間（旧敷島町南部）には、南北に延びる2本の微高地があり、本遺跡は東側の微高地上に営まれている。

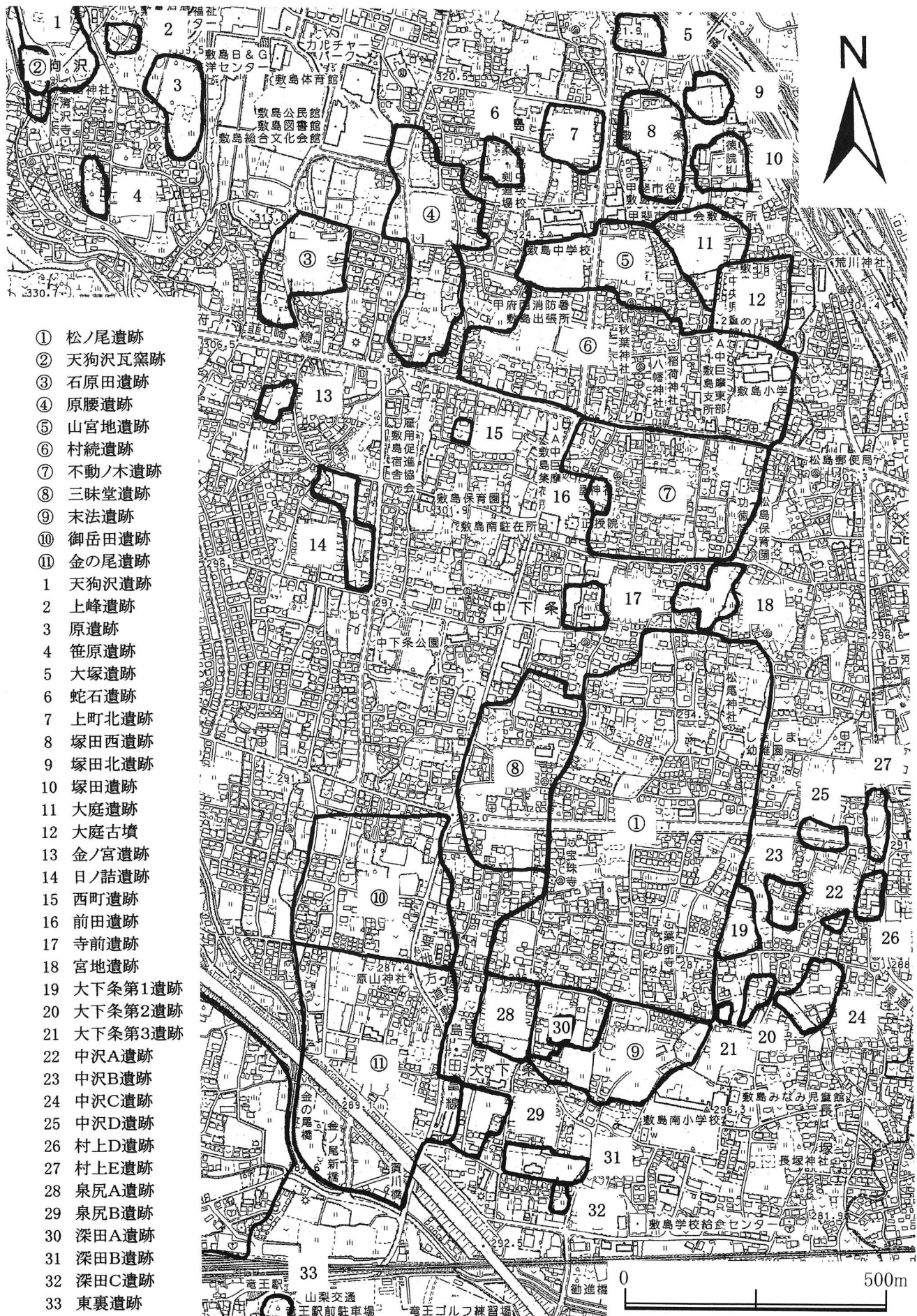
松ノ尾遺跡の調査は、甲斐市大下条、中下条、長塚を通る都市計画街路愛宕町下条線の道路建設にともなって平成6年（1994）から平成7年（1995）にかけて発掘が行われたのが始まりである。

松ノ尾遺跡は、甲斐市内の大下条・中下条地区にあり、その範囲は南北に約700m、東西に約400mの広がりをもつことが明らかになっている。第1次調査では、後に県指定文化財（平成8年5月2日指定）となる「銅造仏形坐像」2軀が出土している。同一遺跡から仏像が2軀発見されることは、全国でも珍しい。

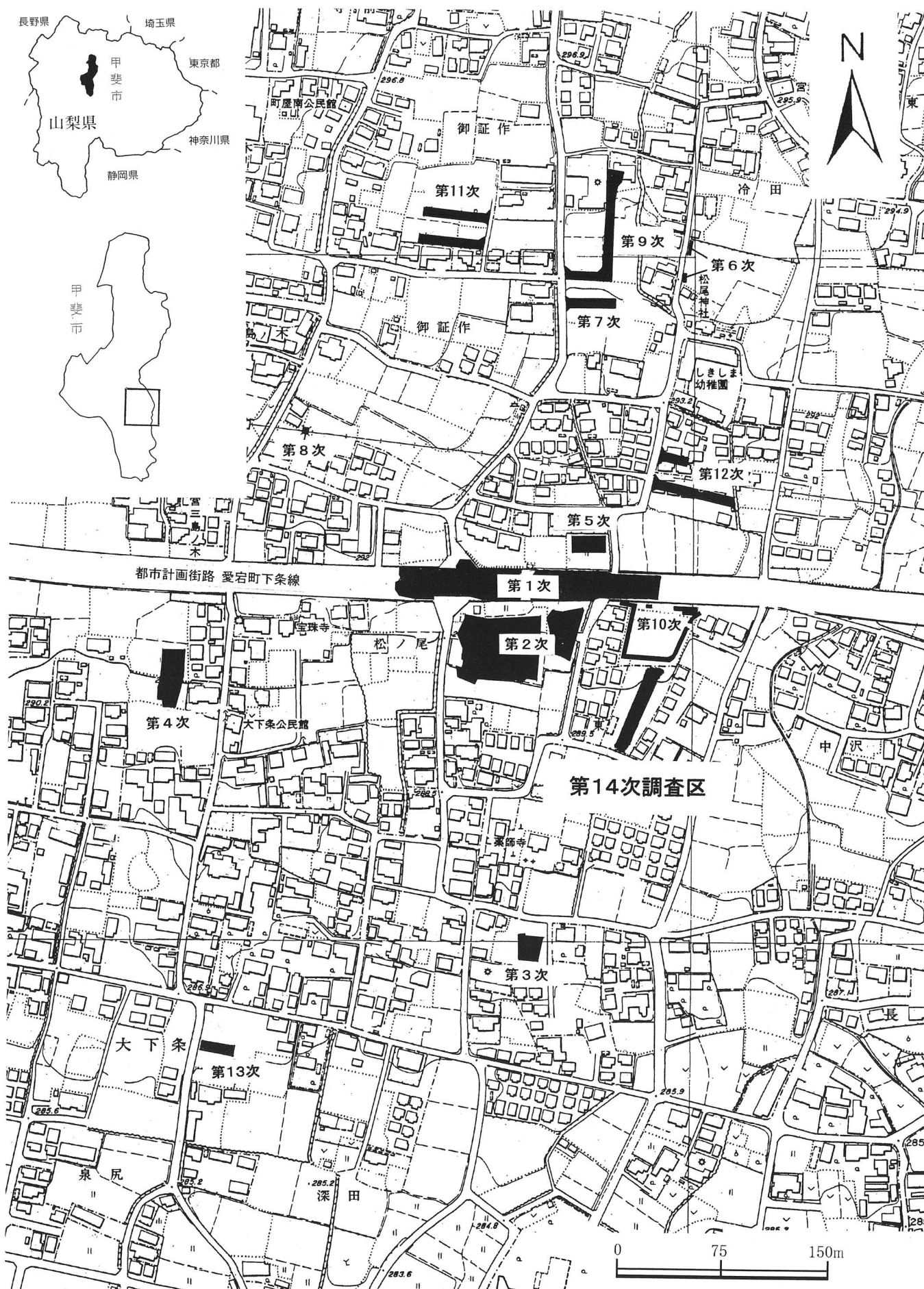
今回で松ノ尾遺跡の調査は14次調査になるが、今回までに住居跡は124件確認されている。遺構は住居跡が中心で縄文時代から平安時代まで確認されている。そのうちの60軒（全体の48%）が平安時代の住居跡、38軒（全体の30%）が古墳時代の住居跡となっている。

松ノ尾遺跡は、古墳時代から平安時代の遺構を中心とした、複合遺跡であることがうかがえる。

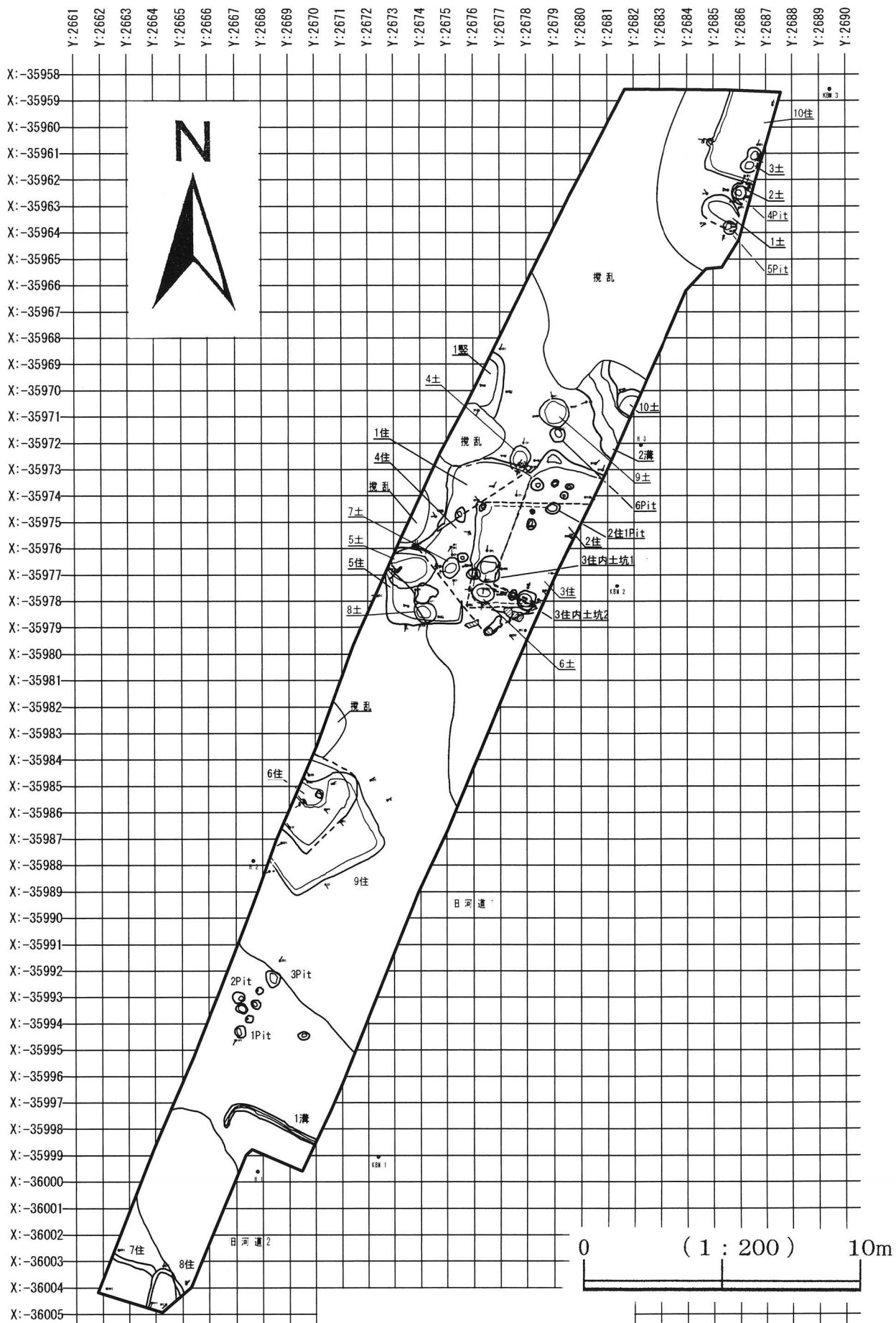
特に古代の出土遺物をみると、第1次調査から第13次調査にかけて、7世紀後半から11世紀にかけて銅造仏形坐像や螺髪、転用硯、白磁、青磁など周辺遺跡に見られる集落の出土遺物の様相と異なる。このことから松ノ尾遺跡は、本県の古代史を解明する上で重要な遺跡のひとつであると考えられる。



第1図 松ノ尾遺跡と周辺の遺跡



第2図 調査区位置図



第3図 調査区全体図

第2章 遺構と遺物

今次調査は、宅地造成工事に伴う工事前の調査である。

調査区は、宅地造成部分の道路にあたり、337㎡。南北に細長い調査区である。試掘調査ではわからなかったが、後世に重機等で掘削され、調査区のおよそ1/4は、廃材などを含む攪乱であった。また、調査区の真ん中より南側は、円礫や砂が東西に渡って広がっており、旧河道と考えられる。

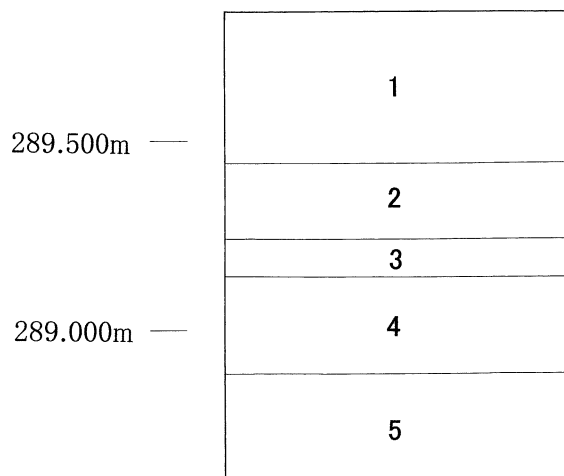
遺構・遺物が確認されたのは、主に、調査区の真ん中より北側であった。調査区の北側は、攪乱部分がほとんどであり、攪乱がないところに遺構が密集していた。攪乱を受けなければ、全面が遺構であったと推測できる。

第1節 基本層位

基本土層は、調査区の北側東端のものである。

第1層地表下30cmまで、茶褐色砂質土、粘性なし、しまり中。第2層地表下30～60cm茶褐色砂質土、粘性なし、しまり中。白色粒子、褐色土を含む。耕作土。第3層地表下60～65cm褐色砂質土、粘性なし、しまり中。

第4層65～75cm茶褐色砂質土、粘性なし、しまり中。遺物包含層。第5層75～100cm暗茶色砂質土、粘性なし、しまり中。遺物包含層、および地山を掘り込む遺構部分。



第4図 基本層位

第2節 住居跡

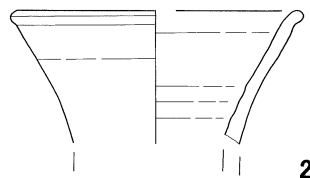
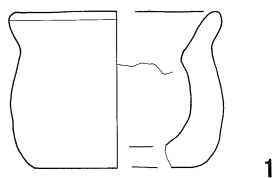
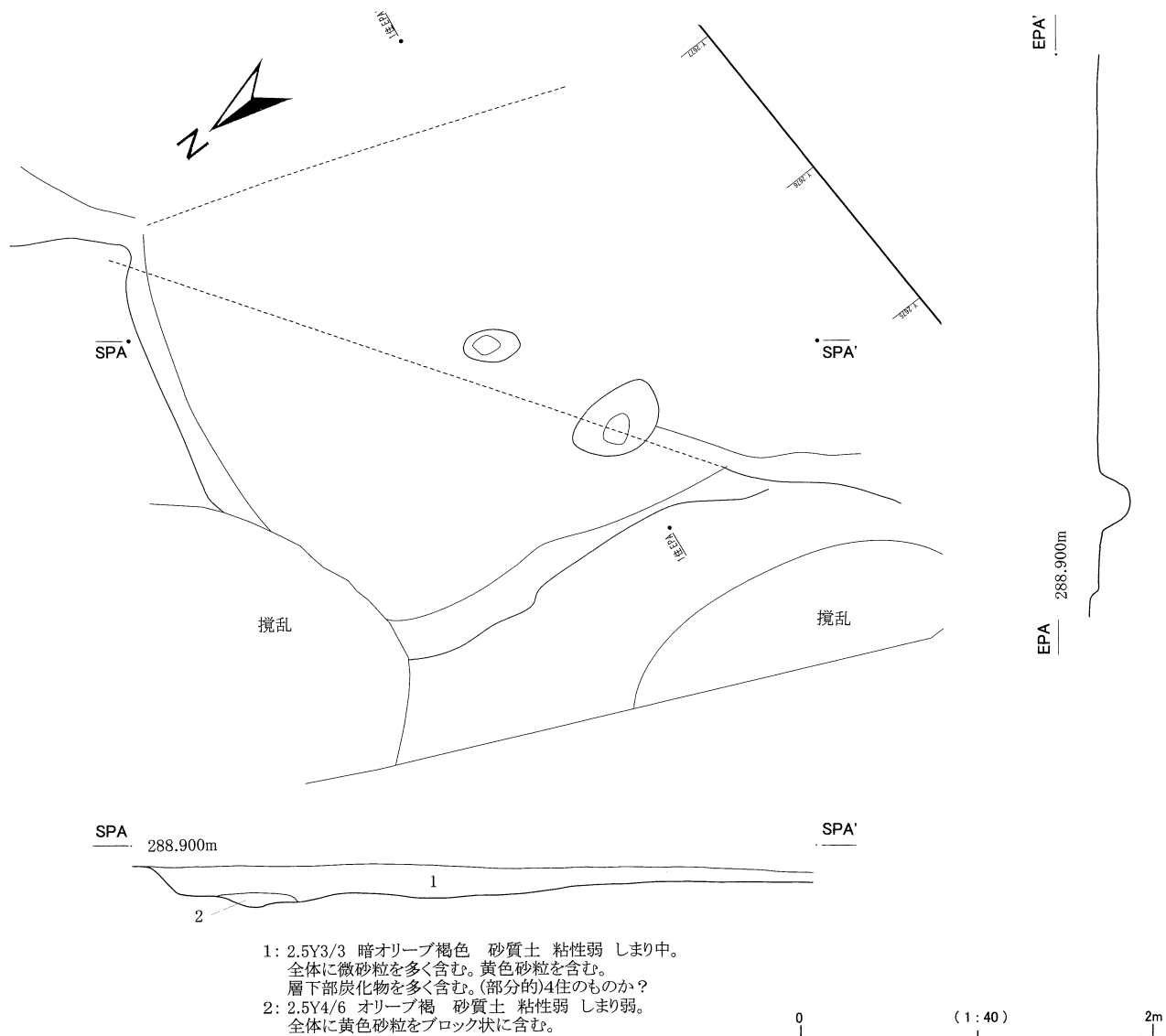
今回の調査区では、最大5軒が重なる計10軒の住居跡が確認できた。10軒のうち、古墳時代の住居跡4軒、平安時代の住居4軒、時代不明の住居2軒であった。

1号住居跡

位置 1号住居跡は、調査区中央に位置する5軒が重複する住居群の中にある。重複しているため、遺構全体を把握することはできなかった。

形状 遺構の北壁、西壁の一部が確認でき、北西コーナーは、後世による攪乱によって、壊されていた。北壁、西壁とも壁の立ち上がりは、緩やかで高さは17cmである。また西壁付近には、柱穴と考えられるピットが確認できた。1号住居に伴うピットの深さは、床面から18cmである。

遺物 ミニチュア土器、灰釉陶器が確認できた。



0 (1:2) 10cm

第5図 1号住居跡・出土遺物

第1表 1号住居跡出土遺物観察表

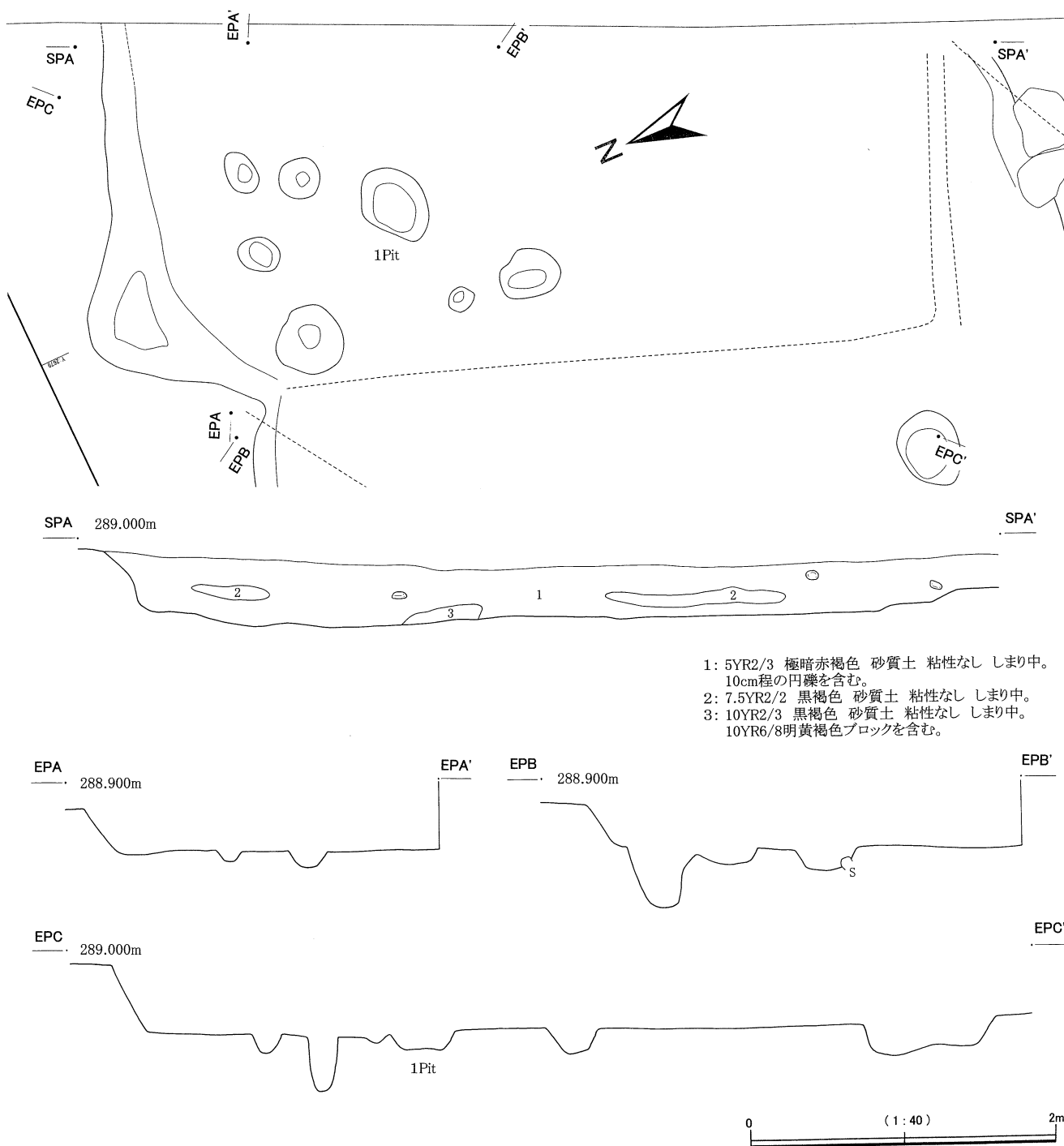
図版 番号	注記番号	器 種	器 形	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色 調	胎 土	焼成	文様・特徴	時 代
1	F14-1住P-1	土師器	ミニチュア土器	(5.3)	(4.6)	4.1	にぶい赤褐 5YR5/4	長石・石英	良好		
2	F14-1住一括	灰釉陶器		(7.2)		残3.5	灰黄 2.5Y6/2	緻密	良好		

2号住居跡

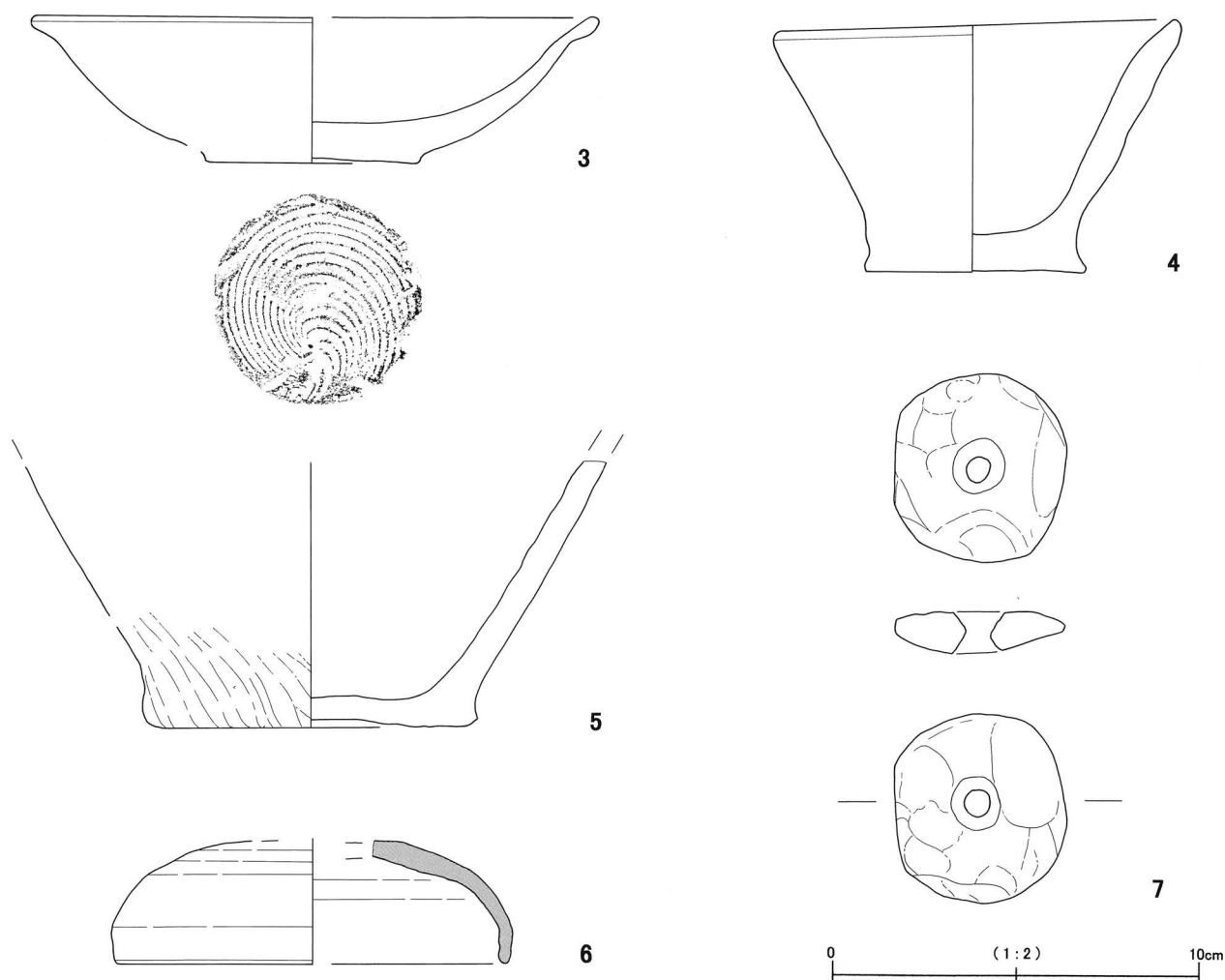
位置 調査区中央に位置する5軒が重なる住居群の中にある。遺構の東側は、調査区東壁になっている。遺構の南側は、3号住居に削られているため、残っていない。

形状 遺構として確認できたのは、北西コーナーのみである。コーナー部分は、段がついている。立ち上がりは、垂直に近く、壁面は42cmを測る。また、調査区の壁から、遺構の断面が確認でき、南北の長さは、5.5mとなっている。

遺物 古墳時代後期と考えられる、甕の底部（No.5）や須恵器の蓋（No.6）などが確認できたことから、古墳時代の遺構であると考えられる。また、この遺構から平安時代の坏（No.3）も確認されているが、これは重複した別の遺構のものと考えられる。



第6図 2号住居跡



第7図 2号住居跡出土遺物

第2表 2号住居跡出土遺物観察表

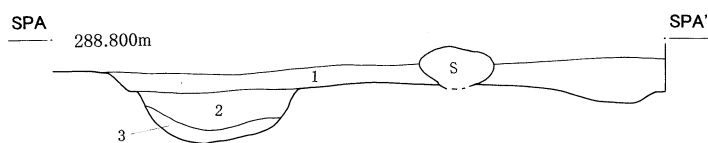
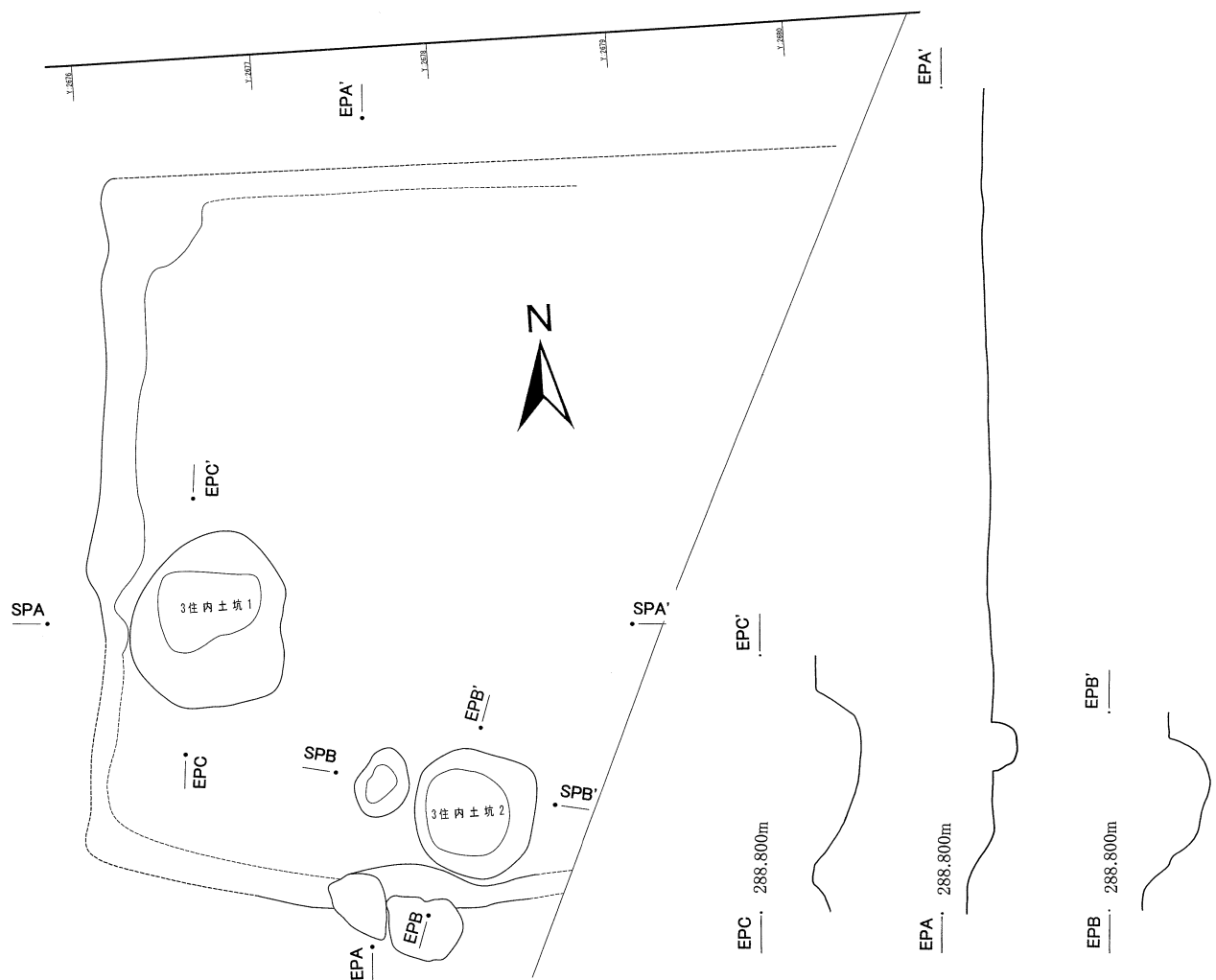
図版 番号	注記番号	器 種	器 形	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色 調	胎 土	焼成	文様・特徴	時 代
3	F14-2住一括	土師質土器	坏	(15.2)	5.8	4.0	灰褐 5YR4/2	金雲母	良好	底部糸切痕	平安11C末
4	F14-2住P-2	土師器	鉢	10.8	6.0	7.0	にぶい赤褐 5YR5/4	長石・金雲母	良好	内面横方向ミガキ 外面縦方向ミガキ	弥生6A～古墳前期 3C～4C前葉
5	F14-2住P-5 (床直)	土師器	甕の底部		8.8	残7.2	明赤褐 5YR5/6	長石・石英	良好	外面縦方向ハケメ	古墳後期
6	F14-2住一括	須恵器	蓋	(10.6)	(4.0)	3.3	灰5Y5/1	緻密	良好		古墳後期 6世紀4四半期
7	F14-2住S-1	石製品	紡錘車	最大長 5.2	最大幅 4.7	最大厚 1.1					

3号住居跡

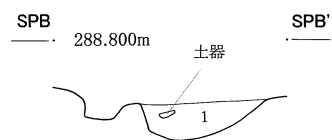
位置 調査区中央に位置する5軒が重なる住居群の中の2号住居跡と重なるように確認できた。そのため、西壁の立ち上がり、南壁の立ち上がりをそれぞれ部分的に確認し、それに伴う貼り床も確認できた。

形状 西壁と南壁の延長ラインから、方形の遺構が推定できる。また、土坑が住居跡と同じレベルで2基確認できた。貼り床から、壁の立ち上がりまで、10cmとなっている。

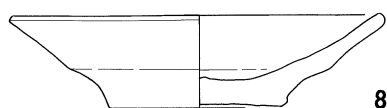
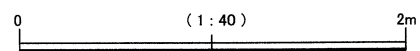
遺物 平安時代後期の脚高台(No.14)や柱状高台(No.13)、土師質土器の小皿(No.8・9・10)が確認できたことから、平安時代後期の住居跡と考えられる。また、土坑内からは砥石(No.21)が出土している。



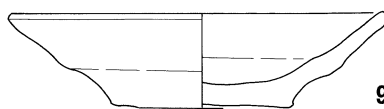
- 1: 7.5YR2/2 黒褐色 砂質土 粘性なし しまり中。
 2: 7.5YR2/3 極暗褐色 砂質土 粘性なし しまり中。
 3: 7.5YR3/4 暗褐色 砂質土 粘性なし しまり中。
 10YR6/8明黄褐色砂質土ブロックを多く含む。



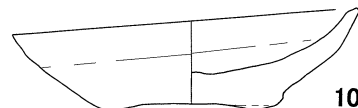
- 1: 7.5YR2/3 極暗褐色 砂質土 粘性なし しまり中。
 10YR6/8明黄褐色ブロックを含む。



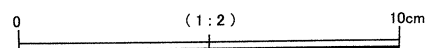
8



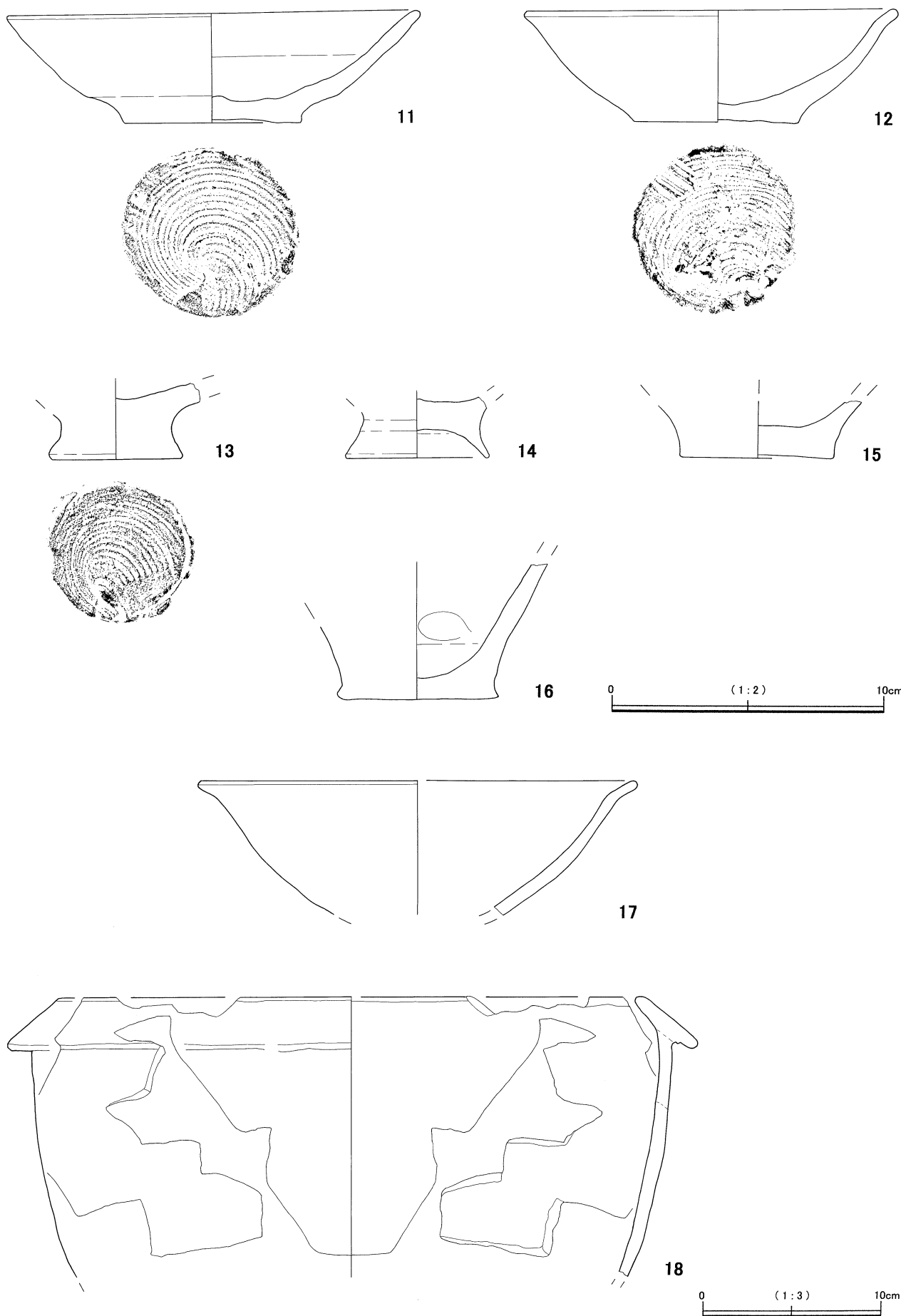
9



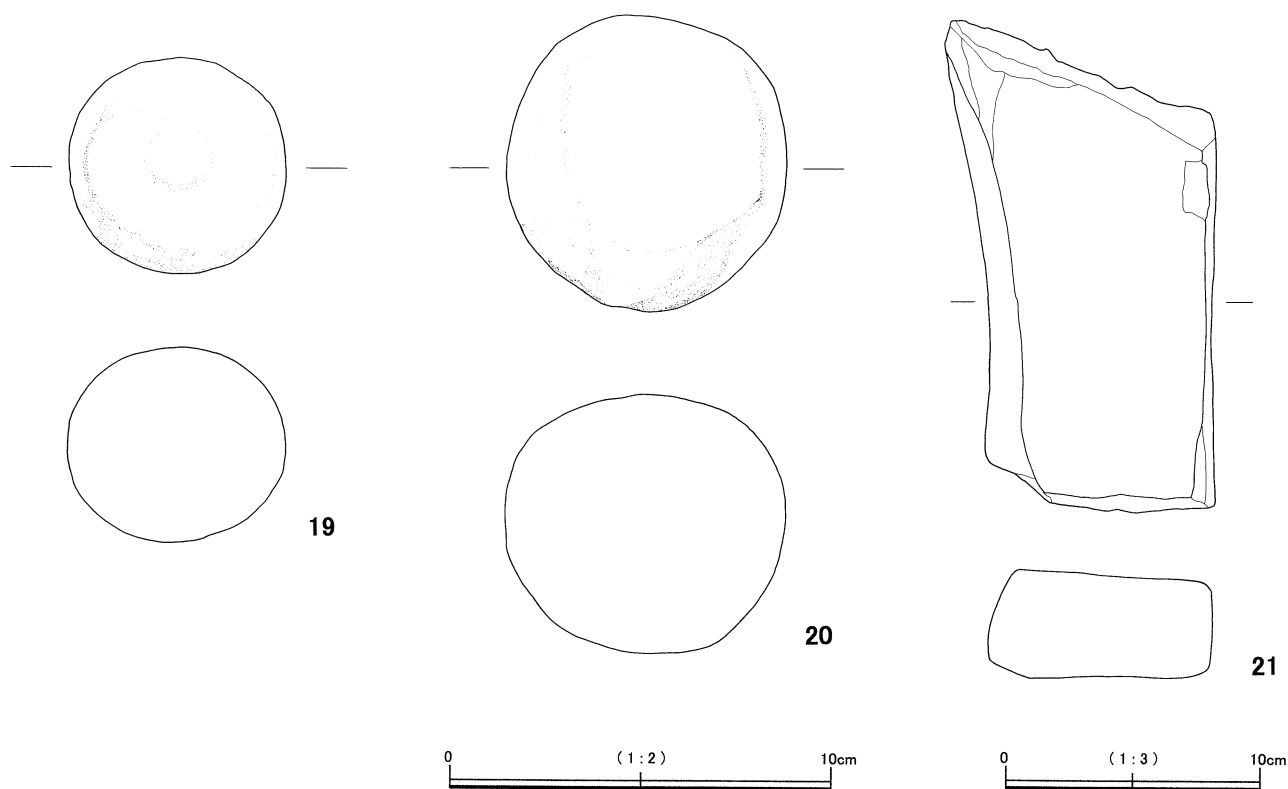
10



第8図 3号住居跡・出土遺物



第9図 3号住居跡・出土遺物(1)



第10図 3号住居跡・出土遺物（2）

第3表 3号住居跡出土遺物観察表

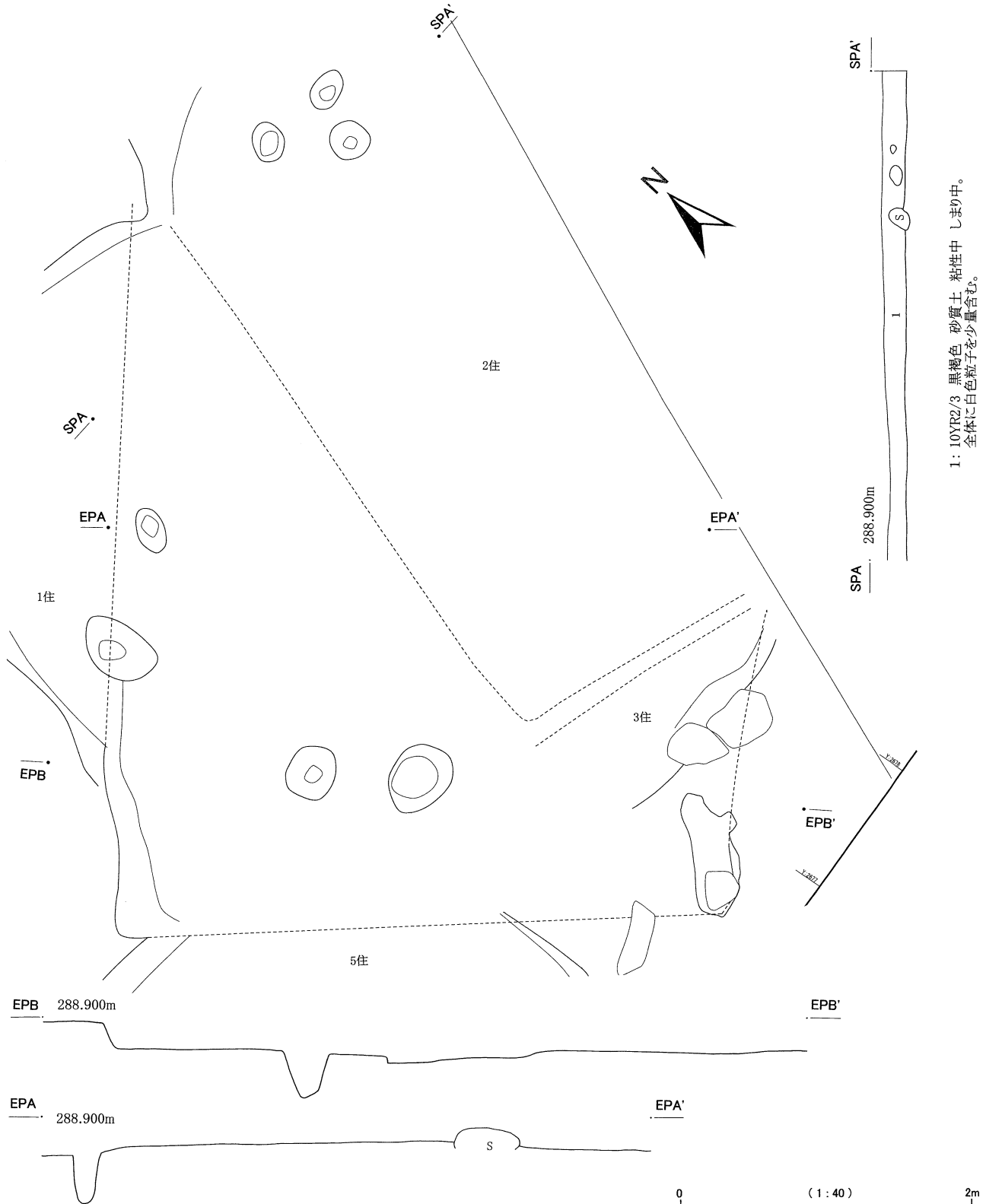
図版 番号	注記番号	器 種	器 形	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色 調	胎 土	焼成	文様・特徴	時 代
8	F14-3住P-9 F14-2住一括	土師質土器	小皿	9.5	4.6	2.4	明赤褐 2.5YR5/6	金雲母	良好	底部糸切痕	11C末～12C
9	F14-3住P-8	土師質土器	小皿	9.6	4.7	2.5	黒褐 7.5YR3/1	金雲母多量	良好	底部糸切痕	11C末～12C
10	F14-3住内土坑 2P-1	土師質土器	小皿	9.0	4.5	2.8	褐7.5YR4/6	金雲母	良	底部糸切痕	11C末～12C
11	F14-3住P-6	土師質土器	坏	14.9	6.4	4.1	暗褐 7.5YR3/3	金雲母	良好	底部糸切痕 ロクロ回転右	
12	F14-3住P-3 F14-3住P-4 F14-3住P-10	土師質土器	坏	13.3	6.1	4.2	にぶい赤褐 5YR4/4	金雲母	良好	底部糸切痕	
13	F14-3住内土坑 1一括	土師質土器	柱状高台		4.8	残2.8	灰黄褐 10YR5/2	金雲母多量	良	底部糸切痕	11C末～
14	F14-3住P-11	土師器	脚高高台		5.3		にぶい褐 7.5YR5/4	金雲母	良		11世紀前半
15	F14-3住P-12	土師器	甕		5.6	残2.2	にぶい黄橙 10YR7/2	長石・金雲母 少量	良		
16	F14-3住内土坑 2P-2	土師器	甕		6.0	残5.1	褐7.5YR4/6	長石・雲母・ 赤色粒子	良		
17	F14-3住P-13 F14-2住P-4(床 直)	土師器	鉢	(13.6)		残7.4	灰黄褐 10YR4/2	長石・石英	良好	内面赤彩 内面横方向ミガキ 外面横方向ハケメ	
18	F14-3住P-5 F14-3住一括	土師器	羽釜	(30.0)		残15.5	灰赤 2.5YR4/2	長石・雲母・ 赤色粒子	良	内面口縁から胴部に かけて横方向ハケメ 部分的にあり 鏝おそらく全周	10C後半
19	F14-3住S-1	石製品	播り石	最大長 5.7	最大幅 5.7	最大厚 5.1					
20	F14-3住S-2	石製品		最大長 7.8	最大幅 7.3	最大厚 6.8					
21	F14-3住 土 坑 1S-1	石製品	砥石	最大長 19.0	最大幅 8.7	最大厚 4.6				四面砥いだ痕跡あり	

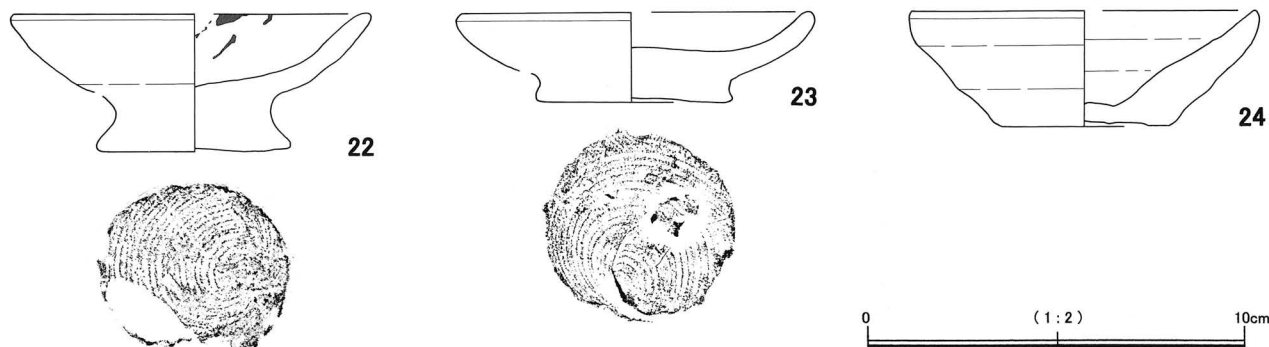
4号住居跡

位置 調査区中央に位置する、5軒が重なる住居群の中の1号住居跡、5号住居跡の間にある。

形状 南西コーナーがほんのわずかに残るのみで、他は1～3号住居跡、5号住居跡と重なっており、形状は、わずかに残る南西コーナーから推測する範囲にとどまる。床面からの壁の高さは、16cmとなっている。

遺物 土師質の土器が確認されている。平安時代後期の皿（No.22・24）、柱状高台皿（No.23）が出土している。遺構が重複しているため、判断が難しいがおおむね11世紀末のものと考えられる。

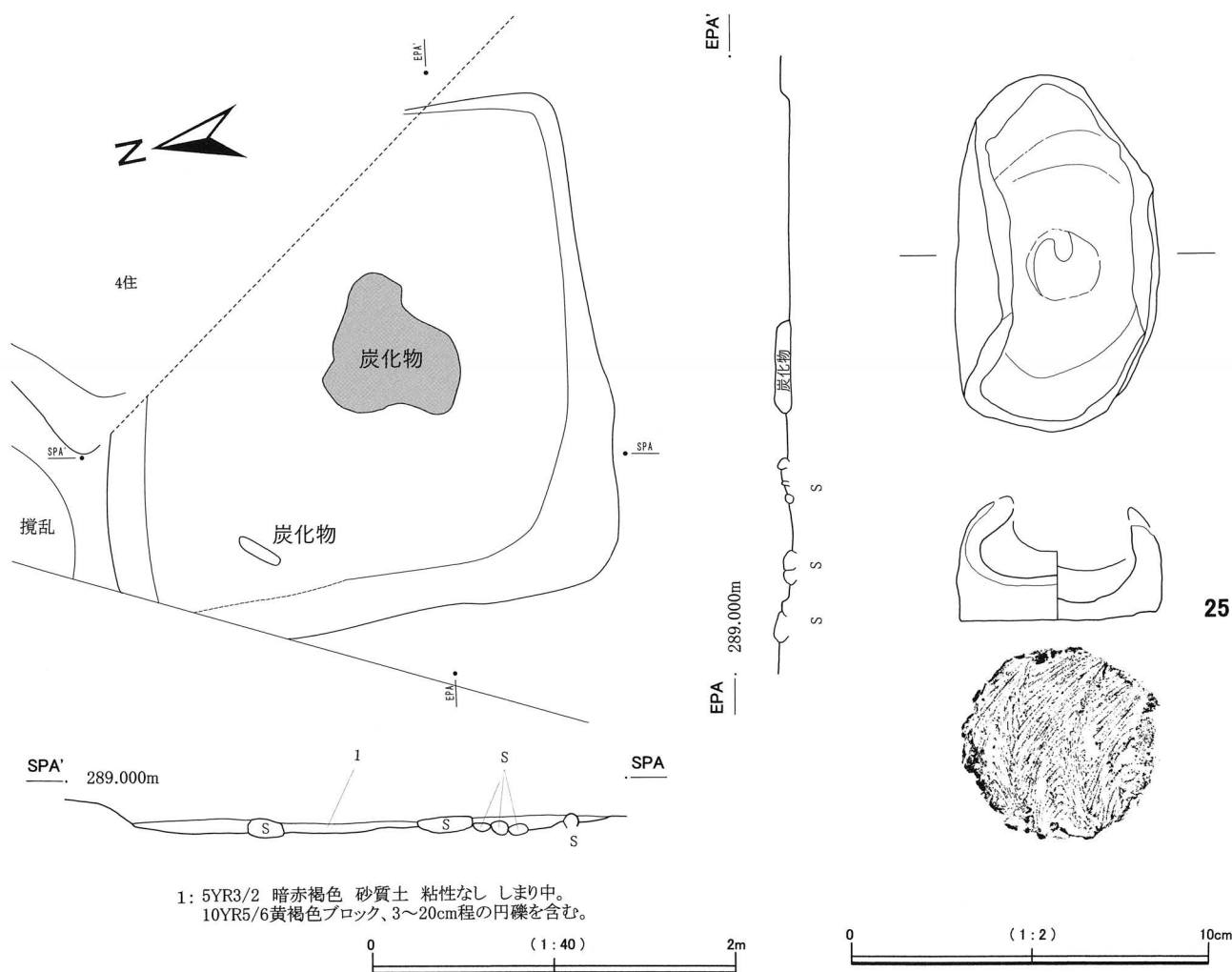




第12図 4号住居跡出土遺物

第4表 4号住居跡出土遺物観察表

図版番号	注記番号	器種	器形	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調	胎土	焼成	文様・特徴	時代
22	F14-4住P-1 F14-3住一括	土師器	柱状高台皿	(9.0)	5.0	3.6	明褐 7.5YR5/6	金雲母多量	良好	底部糸切痕 内面口縁部煤痕	11C末～12C
23	F14-4住P-2	土師質土器	小皿	(9.2)	5.2	2.4	褐7.5YR4/3	金雲母多量	良好	底部糸切痕	11C末～12C
24	F14-4住P-3	土師質土器	小皿	(9.0)	(4.8)	3.0	にぶい黄褐 10YR5/3	金雲母	良好		11C末～12C



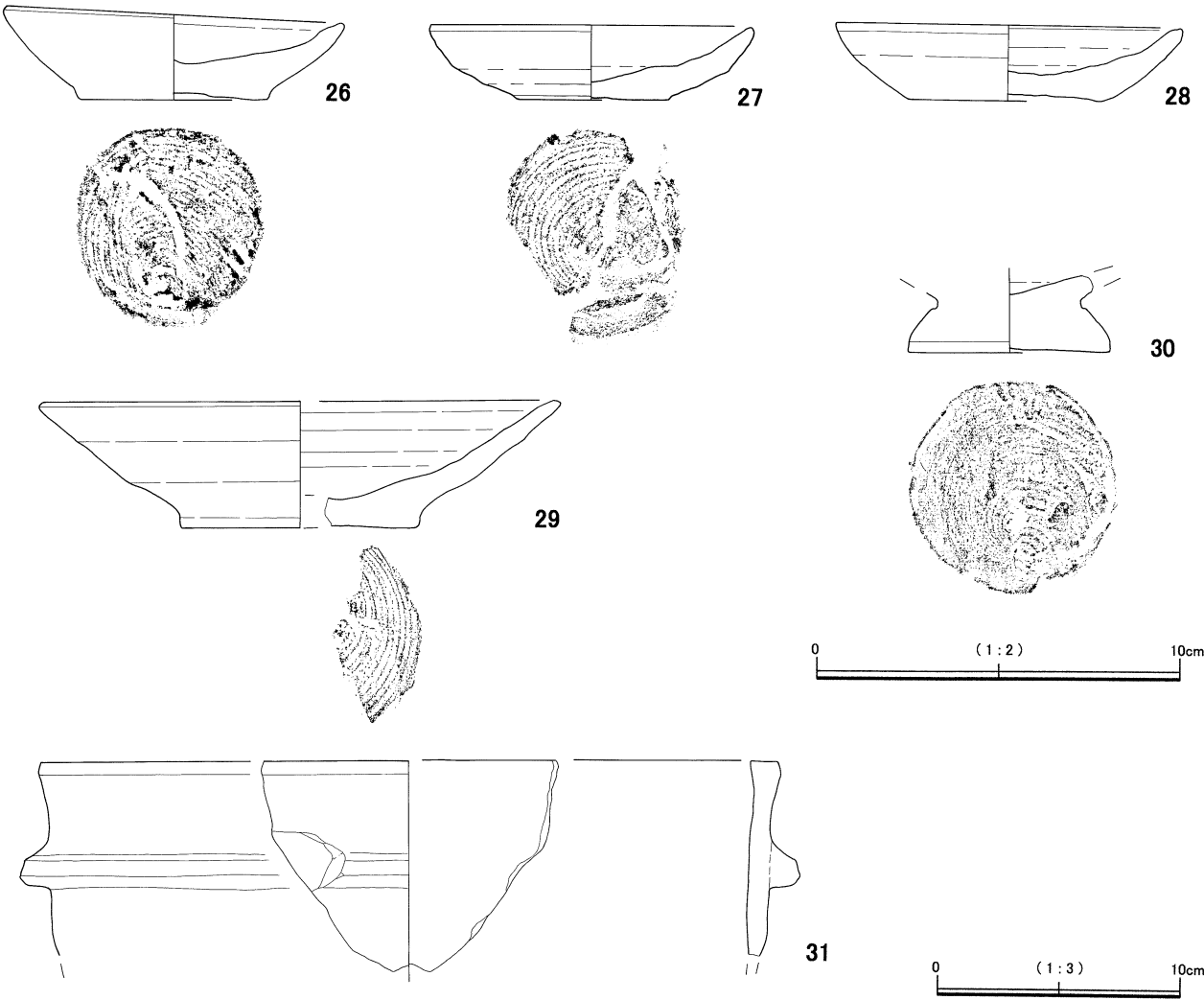
第13図 5号住居跡・出土遺物

5号住居跡

位置 調査区中央の遺構が5軒重複している部分の、南側にあり4号住居跡と重なっている。

形状 5軒が重なる住居跡の中では、残りが一番よく、南北2.85m、東西2.85mの方形をしている。壁は、緩やかに立ち上がり、高さは、18cmである。遺構の中央には炭化物の塊が確認できた。

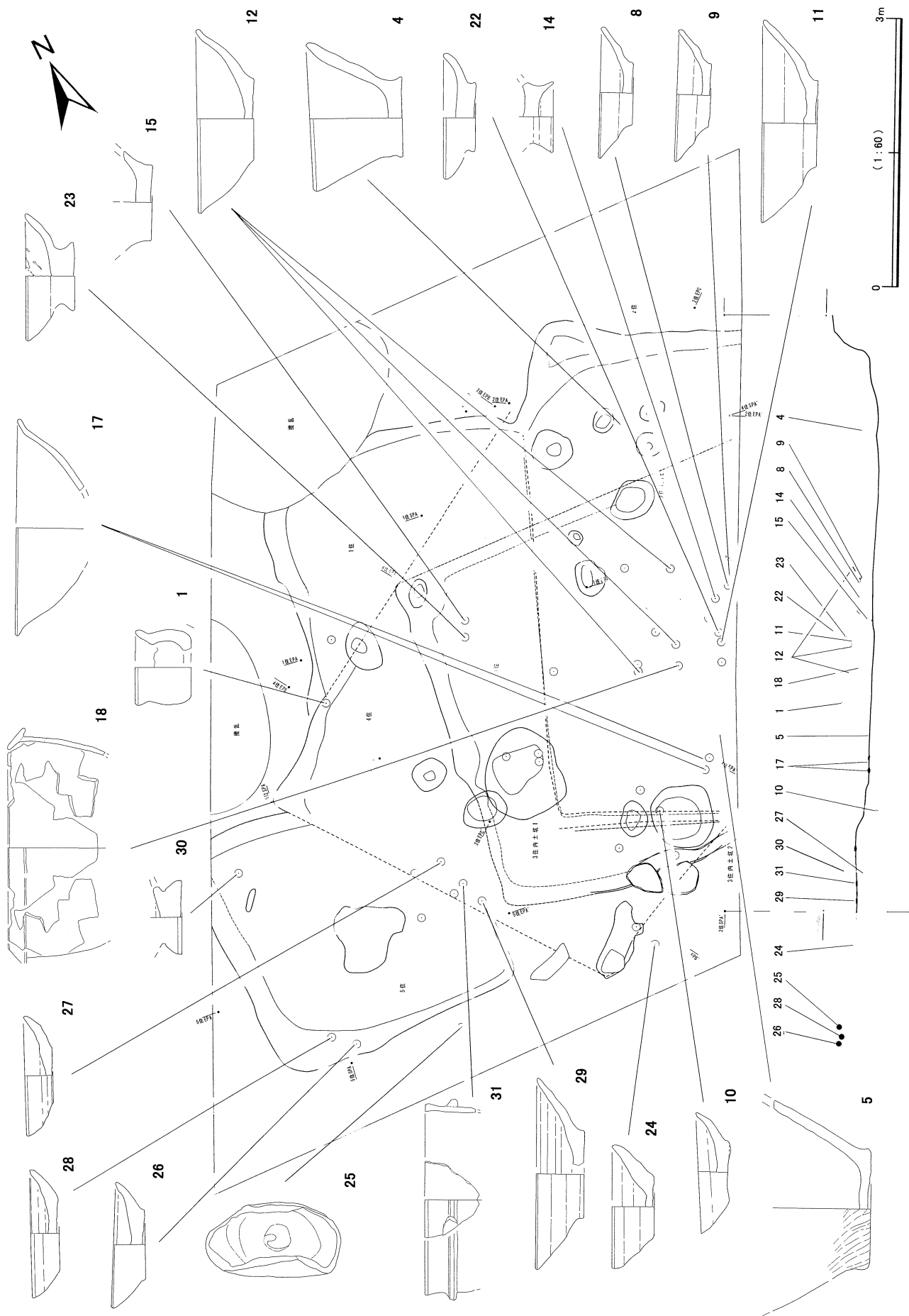
遺物 耳皿（No.25）をはじめ、土師質土器の小皿（No.26・27・28）など、平安時代末期の遺物を多く含む。
このことから、5号住居跡は11世紀末～12世紀初めの遺構であると考ええる。



第14図 5号住居跡出土遺物

第5表 5号住居跡出土遺物観察表

図版 番号	注記番号	器 種	器 形	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色 調	胎 土	焼成	文様・特徴	時 代
25	F14-5住P-1	土師器	耳皿		5.4	残3.3	明褐 7.5YR5/6	小石	良	底部静止糸切痕	10C後半
26	F14-5住P-2	土師器	小皿	9.1	5.2	2.6	にぶい赤褐 5YR5/4	金雲母多量	良好	底部糸切痕	11C末～12C
27	F14-5住P-9	土師質土器	小皿	(9.0)	4.9	2.0	にぶい褐 7.5YR5/4	金雲母	良	底部糸切痕	11C末～12C
28	F14-5住P-3	土師質土器	小皿	9.6	5.4	2.1	明褐 7.5YR5/6	金雲母多量	良		11C末～12C
29	F14-5住P-11	土師器	坏	(14.2)	(6.4)	3.5	黒褐 10YR3/1	金雲母	良好	底部糸切痕	
30	F14-5住P-4	土師質土器	柱状高台		5.6	残2.1	にぶい褐 7.5YR5/4			底部糸切痕	11C末～12C
31	F14-5住P-5	土師器	羽釜	(28.0)		残8.0	灰褐 7.5YR4/2	長石・赤色粒子		鋳部分おそらく全周	10C後半～



第15図 1～5号住居跡・出土遺物分布

1・2・3・4・5号住居重複関係について

1～5号住居跡までは、それぞれが重複関係にあり、形が明確にわかるものがなく、わずかに残る壁の立ち上がりで壁の向きから、それぞれの遺構を推定した。

遺構の密集地の北側に位置する、1・2号住居跡は、遺構の上下関係や遺物から5世紀頃の遺構と考えられる。3号住居跡は、2号住居跡と4号住居跡にはさまれるように確認されている。遺物から、10世紀ごろと推測できる。4号住居跡は、密集している遺構の真ん中に位置し、すべての遺構と重なっている。5号住居跡は遺構密集地の南西に位置し、4号住居跡と重なり、一部は攪乱によって壊されている。4・5号住居跡は、遺物から11世紀末から12世紀初めの遺構と考えられる。

遺物出土分布図をみると、調査区東側の遺構が重なっている部分から、遺物が多く確認された。断面図からは、遺物がほとんど高低差なく、確認されていることがわかり、遺物は平安時代の末頃のものが多く確認されている。

7号住居跡

位置 調査区南側に位置し、8号住居跡と重複関係にある。

形状 遺構の北壁と床面が確認できた。壁の立ち上がりは、緩やかで8cmとなっている。

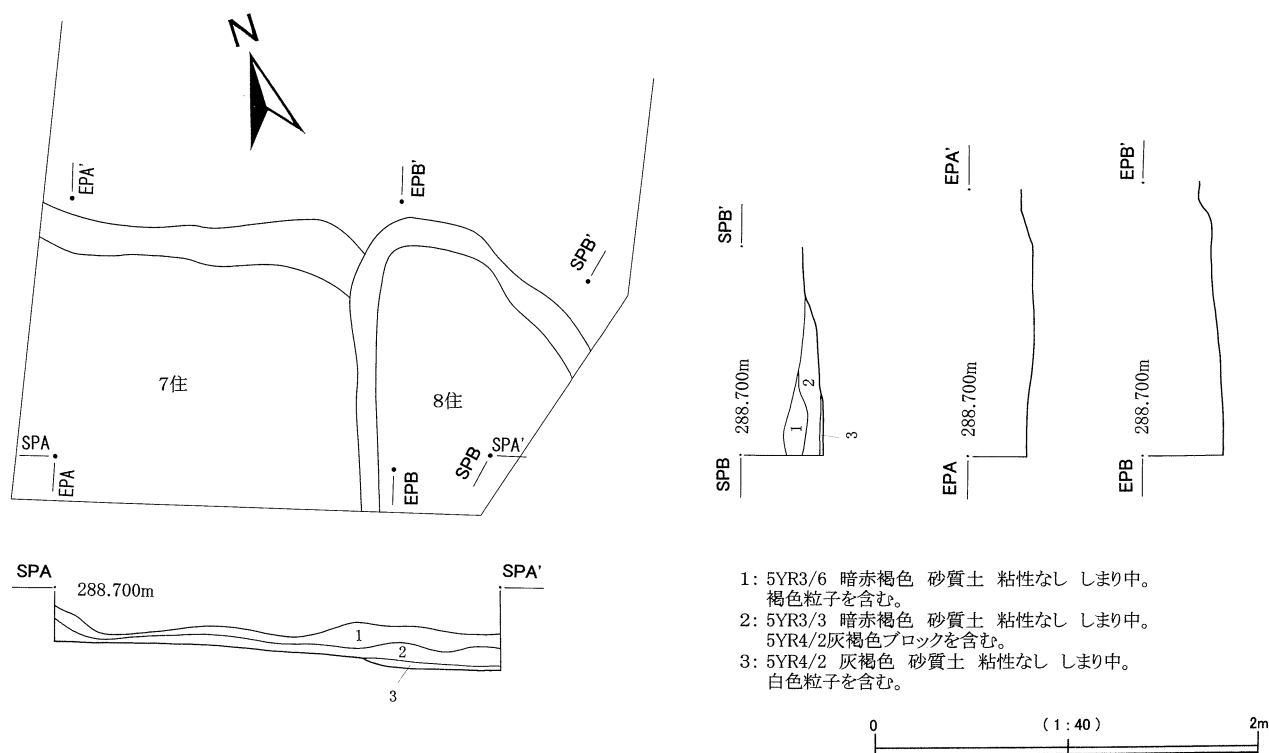
遺物 土器が数点確認できたが、図化できる遺物はなかった。

8号住居跡

位置 調査区南側に位置し、8号住居跡が7号住居跡を切るかたちで確認されている。

形状 北壁と西壁、床面がわずかに確認できたのみで全貌は不明である。北壁は緩やかに立ち上がり、13cmとなっている。

遺物 土器が数点確認できたが、図化できる遺物はなかった。



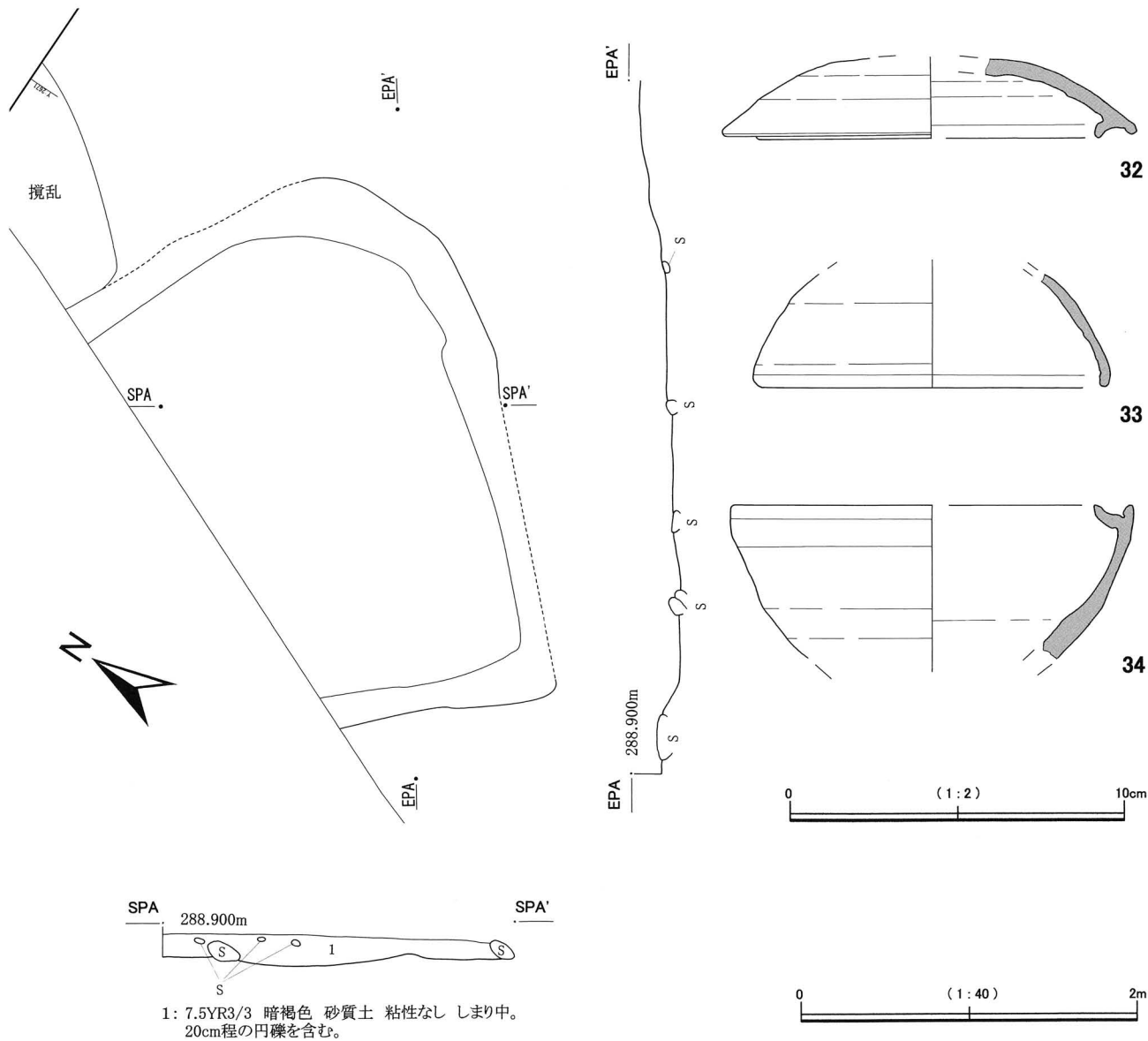
第16図 7・8号住居跡

6号住居跡

位置 調査区の真ん中から南側に位置し、9号住居跡と重複関係にある。

形状 調査区の壁があるため、すべてを調査することはできなかったが、東西およそ3.3mとなっている。

遺物 遺構全体が、9号住居跡と重なっており、高さもほぼ同じため、遺物がどちらの遺構に伴うものなのか判断がむずかしい。6号住居跡として取り上げたものの中には、古墳時代後期（7世紀代）の遺物がみられた。



第17図 6号住居跡・出土遺物

第6表 6号住居跡出土遺物観察表

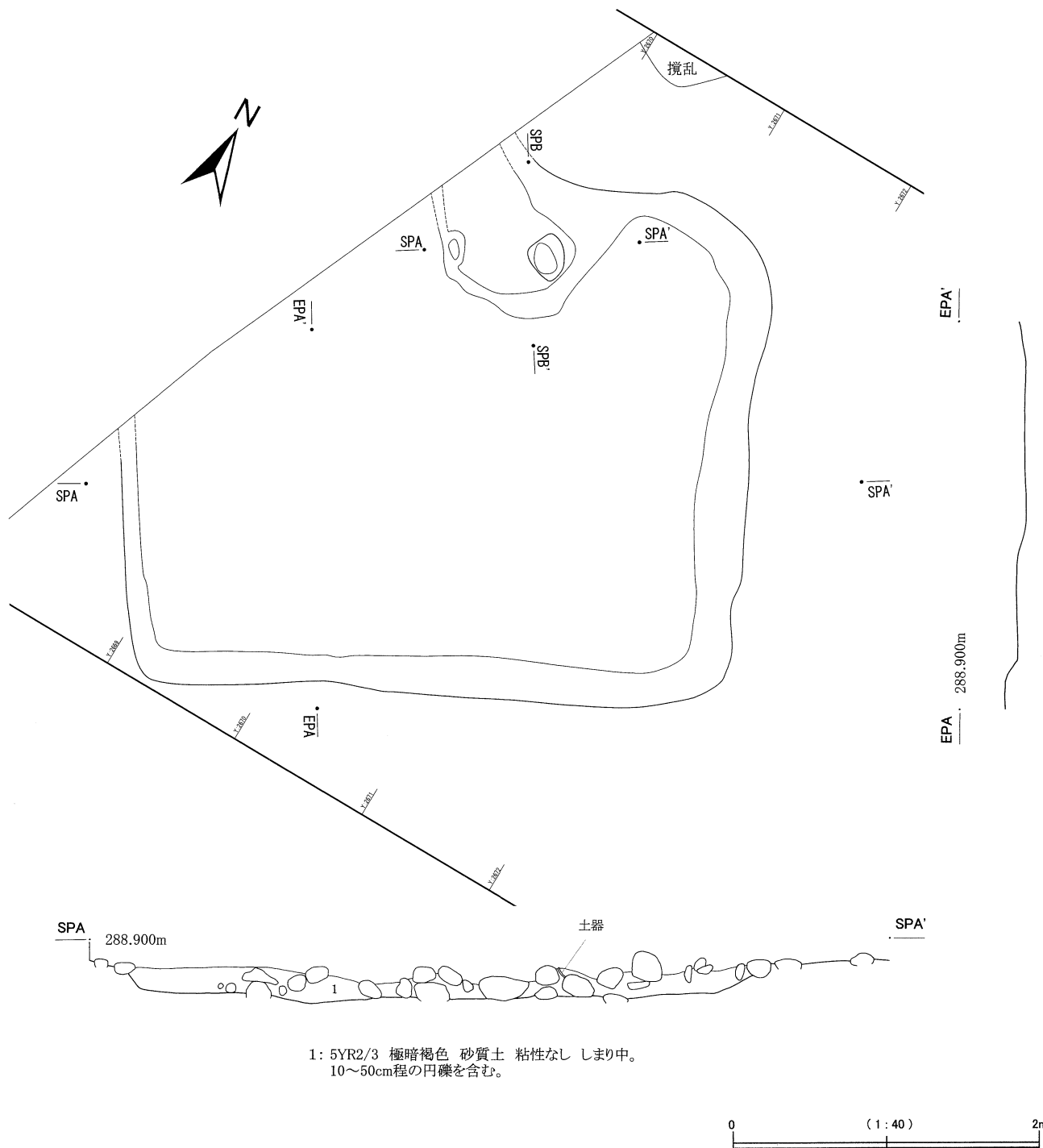
図版 番号	注記番号	器 種	器 形	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色 調	胎 土	焼成	文様・特徴	時 代
32	F14-6住P-21	須恵器	蓋	(12.2)		残2.1	灰白 2.5Y7/1		良好	外面自然釉	古墳後期7C2.3四半期
33	F14-6住P-7	須恵器	蓋	10.0		残3.4	内面黄灰 2.5Y6/1 外面灰N5/				古墳7C1四半～
34	F14-6住P-8 F14-6住一括 F14-9住一括	須恵器	坏	(12.0)		残4.6	灰5Y5/1		良		7C2四半

9号住居跡

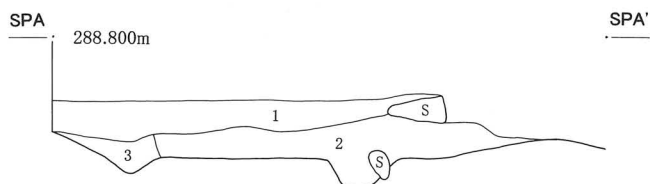
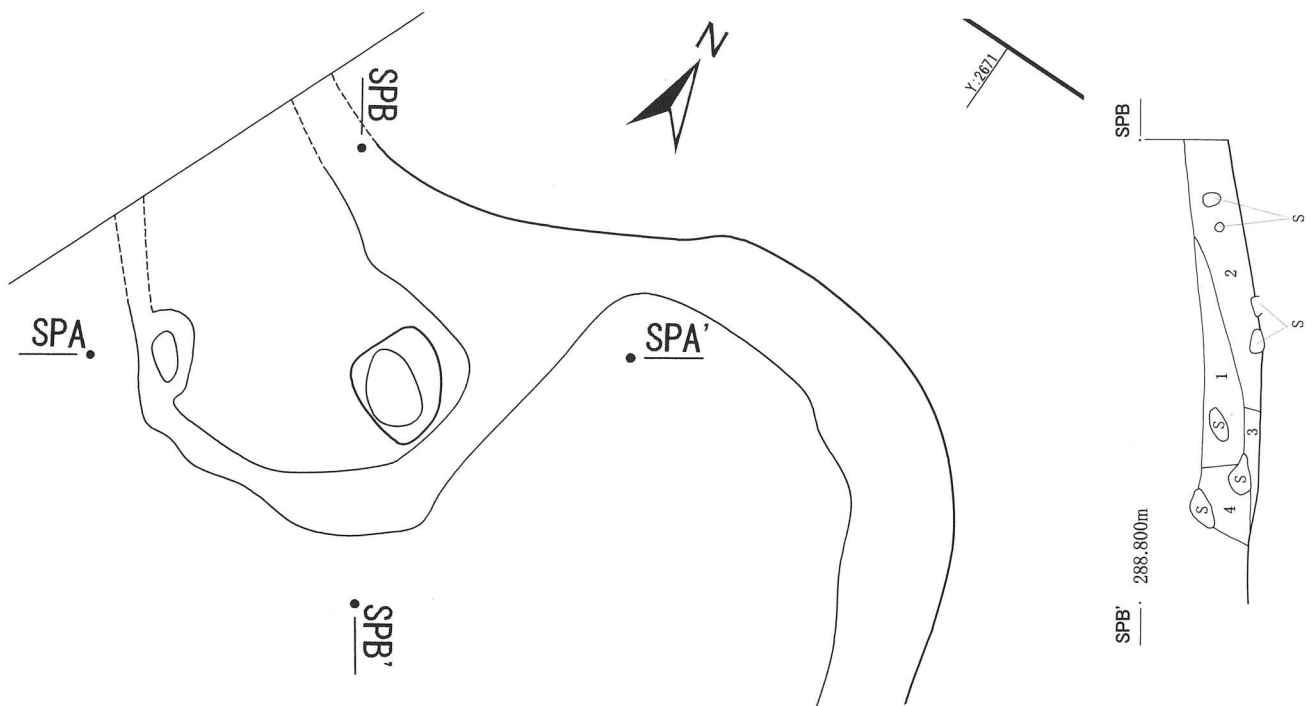
位置 調査区の真ん中南側寄りに位置し、流路の中のス砂礫の中から確認された。

形状 調査区のス壁があるため、遺構のス西側部分を確認することができなかつたが、東西およそ4.2mであつた。
遺構北側にカマドを有する。

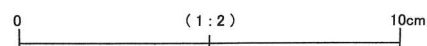
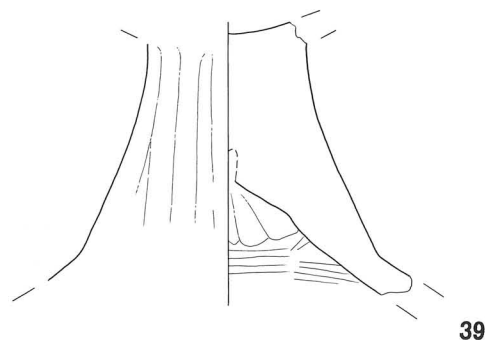
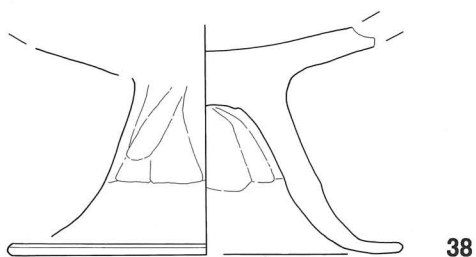
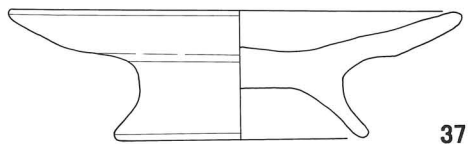
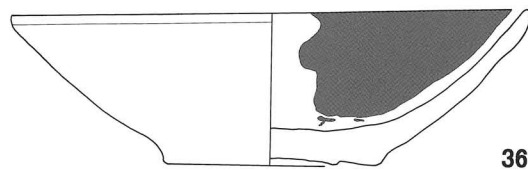
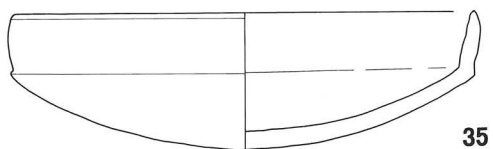
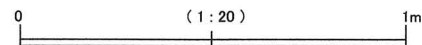
遺物 6号住居跡と重複しており、建物構築後に河川の影響を受けているため、どちらの遺構に伴う遺物なのか判断が難しい。古墳時代後期（6世紀末～7世紀代）の遺物と平安時代末（11世紀末）のものが確認できた。



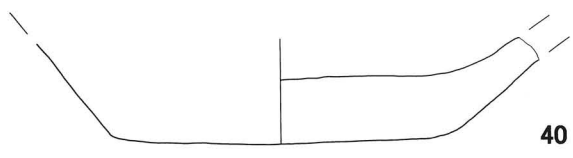
第18図 9号住居跡



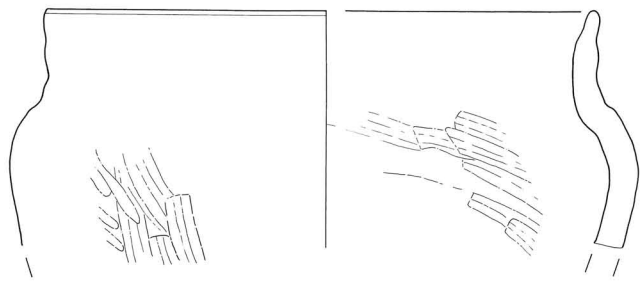
- 1: 5YR4/6 赤褐色 砂質土 粘性なし しまり中。
- 2: 5YR4/8 赤褐色 粒子をまだらに含む。
- 2: 5YR2/2 黒褐色 砂質土 粘性なし しまり中。
- 5YR5/6 明赤褐色 粒子を多く含む。
- 3: 5YR2/2 黒褐色 砂質土 粘性なし しまり中。
- 4: 5YR2/3 極暗褐色 砂質土 粘性なし しまり中。
- 10~50cm程の円礫を含む。



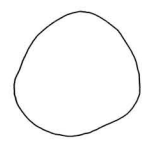
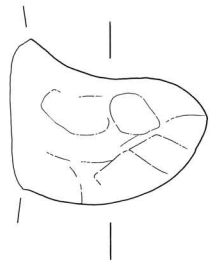
第19図 9号住居跡カマド・出土遺物



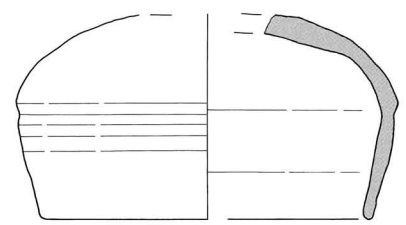
40



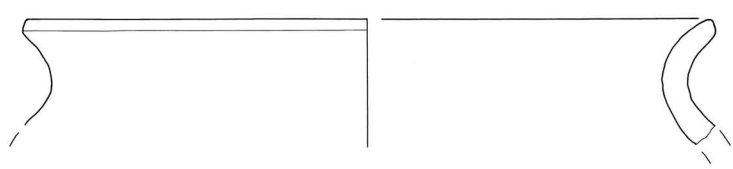
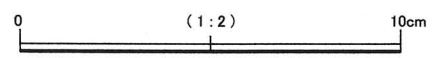
41



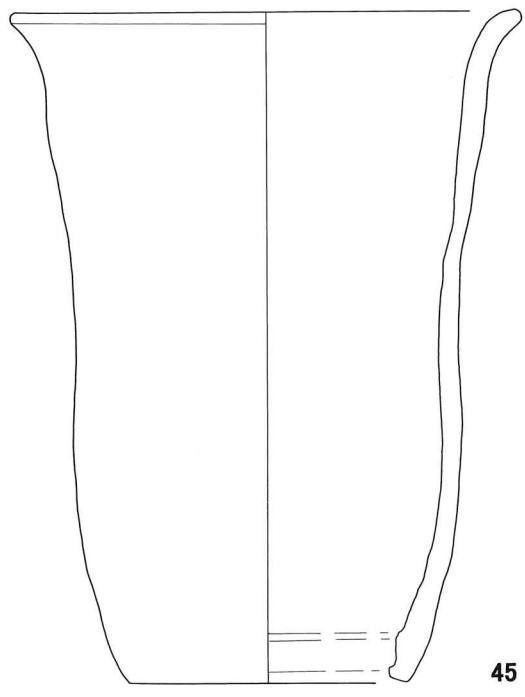
42



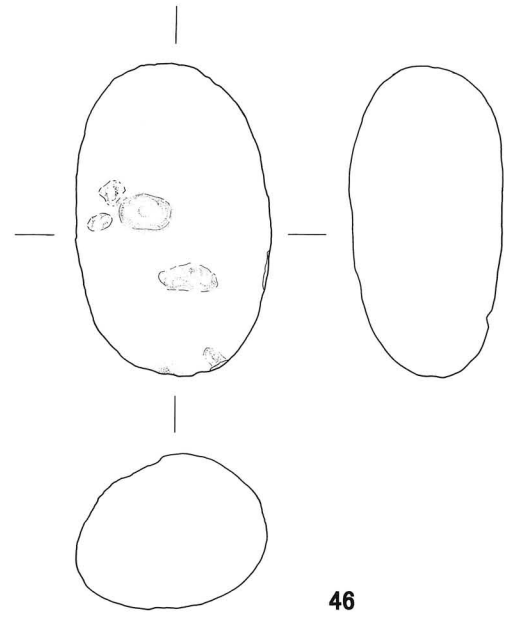
43



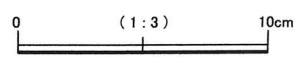
44



45



46



第20図 9号住居跡出土遺物

第7表 9号住居跡出土遺物観察表

図版 番号	注記番号	器 種	器 形	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色 調	胎 土	焼成	文様・特徴	時 代
35	F14-9住P-22 F14-9住一括	土師器	坏	(12.0)		3.1	赤褐 5YR4/8		良	内面赤彩 内外面横方向ヘラ磨き	古墳6C2四半
36	F14-9住P-19 F14-9住一括	土師器	坏	13.4	5.6	4.2	にぶい赤褐 5YR5/4	金雲母多量	良好	底部糸切痕 内面煤痕あり	平安11C末～
37	F14-9住P-10	土師質土器	脚高高台皿	11.7	6.6	3.5	赤褐 5YR4/6	金雲母多量	良好		IX期11C後半
38	F14-9住P-6	土師器	高坏		(10.2)	残6.0	にぶい橙 5YR6/4	長石・赤色粒 子	良好		古墳
39	F14-9住P-3	土師器	高坏				にぶい橙 7.5YR7/4		良		古墳
40	F14-9住カマド P-1 F14-9住カマド P-2	土師器	甕		8.8	残2.7	内面明赤褐 5YR5/6 外面灰褐 7.5YR4/2	赤色粒子・長 石・雲母	良	内面横方向ハケメ	
41	F14-9住カマド 一括 F14-9住一括	土師器	小型甕	(14.2)		残6.3	にぶい赤褐 5YR4/4	長石・石英・ 白色粒子	良好	内面体部横方向ハケメ 外面体部斜め方向ハケ メ	
42	F14-9住P-15	土師器	甕の把手				にぶい赤褐 5YR4/4	赤色粒子・長 石 雲母・石英	良		
43	F14-9住P-14 F14-9住一括	須恵器	蓋	(8.2)		残5.4	灰白 2.5Y7/1	長石	良好	静岡県湖西地域で生産 されたと考えられる	6C1四半期～ 6C2四半期
44	F14-9住P-2	土師器	甕	(26.6)		残5.0	橙7.5YR6/6	長石・石英	良好		古墳？
45	F14-9住P-13	土師器	甕	20.0	9.6	28.5	内面黒褐 10YR3/2 外面にぶ い赤褐 5YR5/4	長石・赤色粒 子・雲母	良	底部中心に直径9.6cm の円孔 口辺部内・外面に横 方向ハケメ	古墳
46	F14-9住S-1		凹石	最大長 12.4	最大幅 5.9*	最大厚 6.1				ひび割れ激しく脆く なっている	

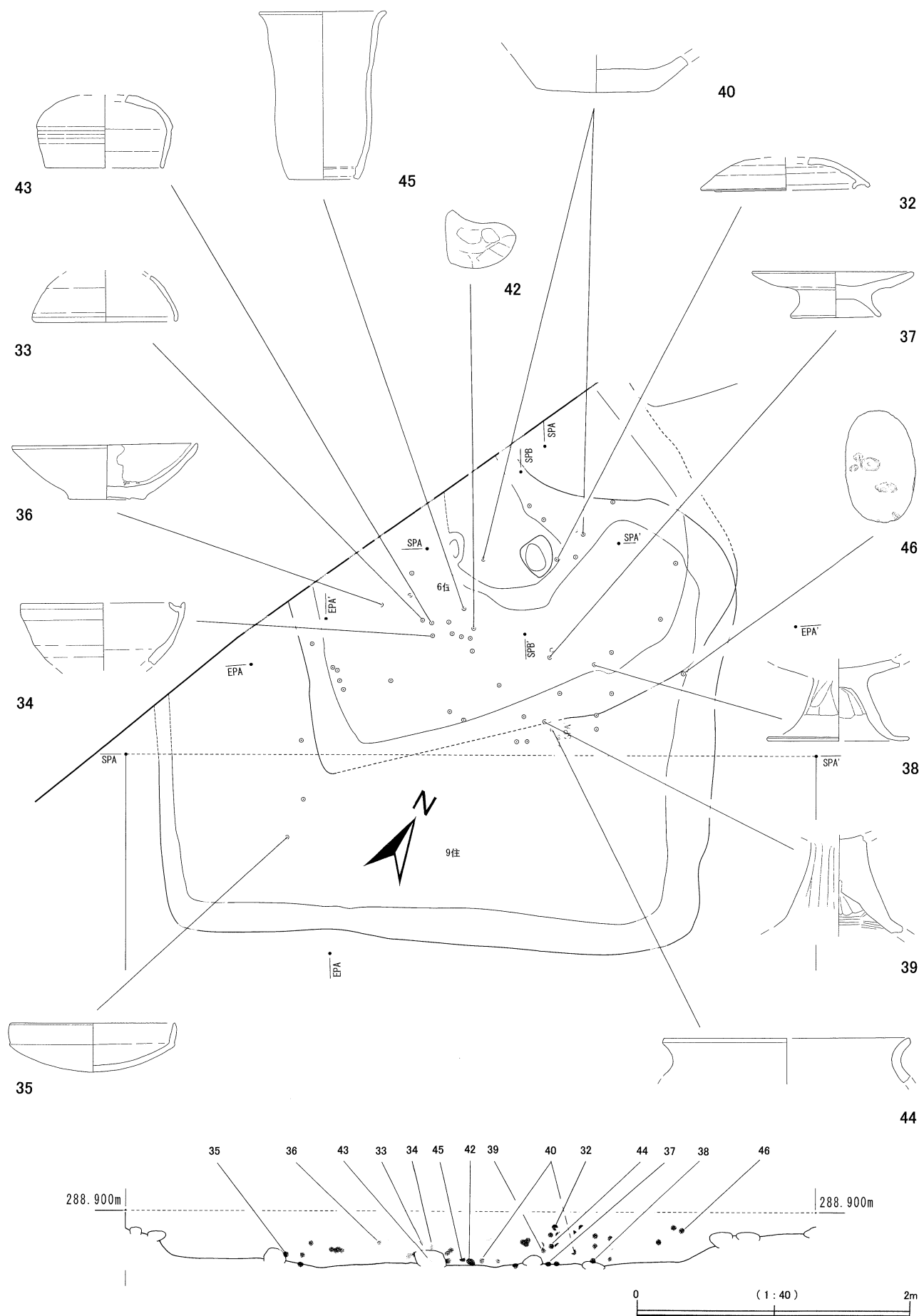
6・9号住居重複関係について

遺構のほとんどが重なっているため、遺物がどちらの遺構に伴うものなのか判断が難しい。また、周辺の状況から後世に川の流路となったと考えられ、遺構・遺物は川の中にありほとんどが流されていて、断面を確認することも難しい状況にあった。壁の立ち上がりも部分的に残るのみであった。6号住居跡の特徴として、一辺がおおよそ3mほどの小規模な住居であるといえる。9号住居跡は、一辺が4.2mほどのカマドを伴う遺構であった。

遺構の新旧は、ほぼ同レベルでの確認のため、むずかしい。また遺物についても、同一層からの確認のため、どちらがどちらの遺構に伴うものなのか、判断には困難を極めた。

遺物の種類は、おおむね古墳時代後期のものと平安時代後期のものであった。

6号住居跡からは、図示した古墳時代の遺物のほかに、平安時代の遺物も確認できた。遺物断面図（第21図）からもわかるように、古墳時代の遺物が下層、平安時代が上層という風に分かれて検出されたわけではなく、同一層からの出土である。6号住居跡からは古墳時代の遺物以外にも平安時代の遺物が確認できているが、9号住居跡に伴うものなのか、判断が難しい。



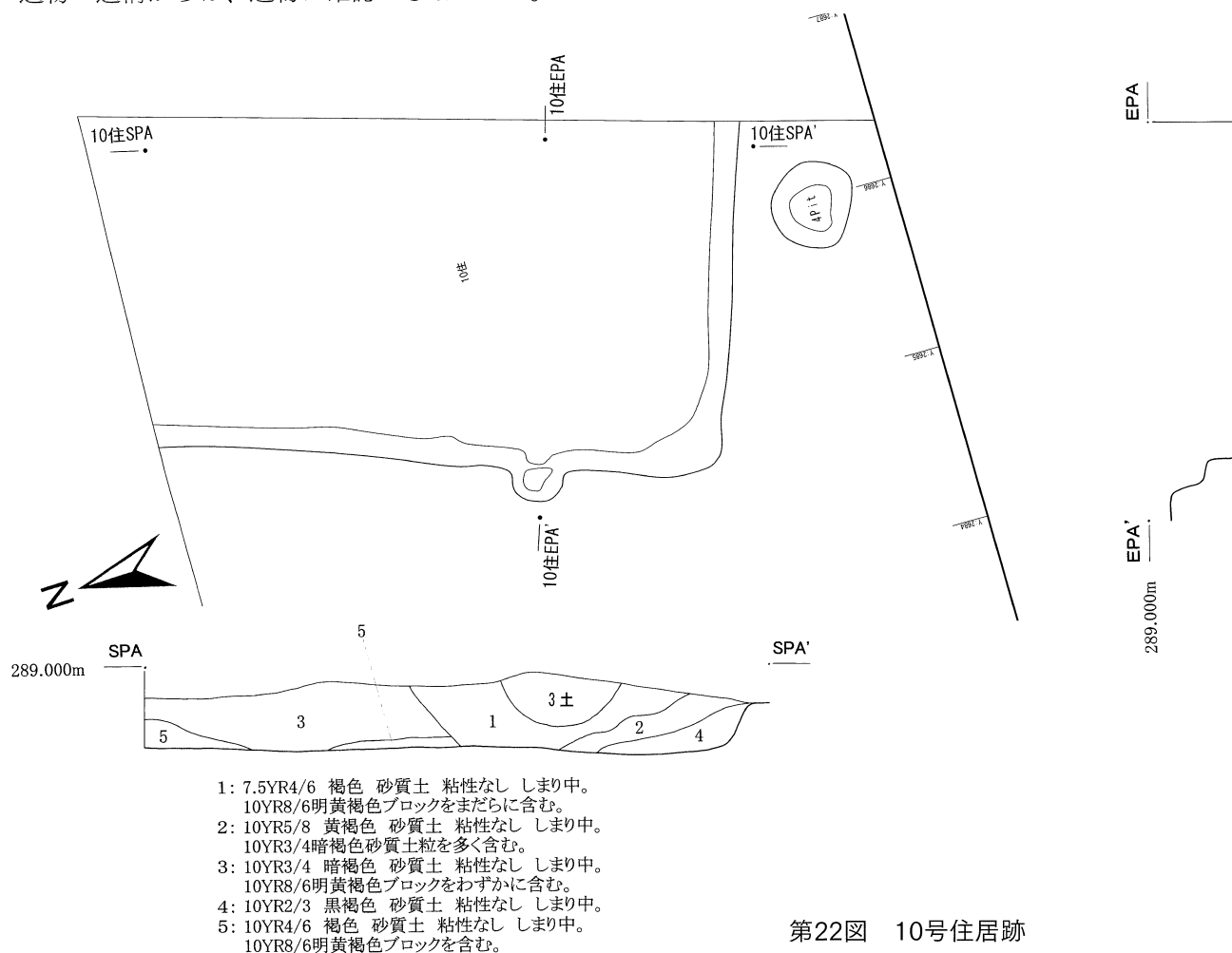
第21図 6・9号住居跡・出土遺物分布

10号住居跡

位置 調査区北側に位置し、1・2・3号土坑の下から確認できた。

形状 調査区の壁によって、遺構全体を確認することはできなかった。遺構の南西コーナーが確認でき、西壁には、遺構に伴うピットが確認できた。壁の立ち上がりは、垂直に近く高さは47cmとなっている。

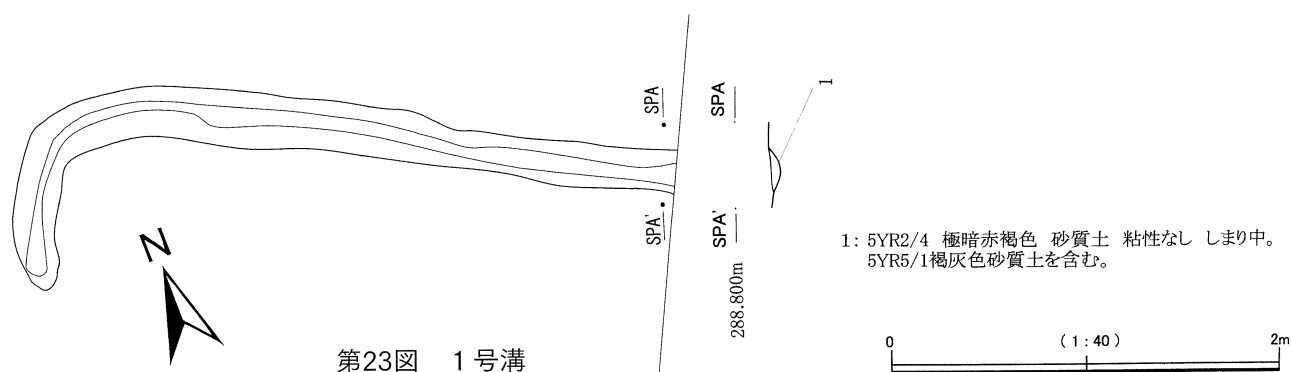
遺物 遺構からは、遺物は確認できなかった。

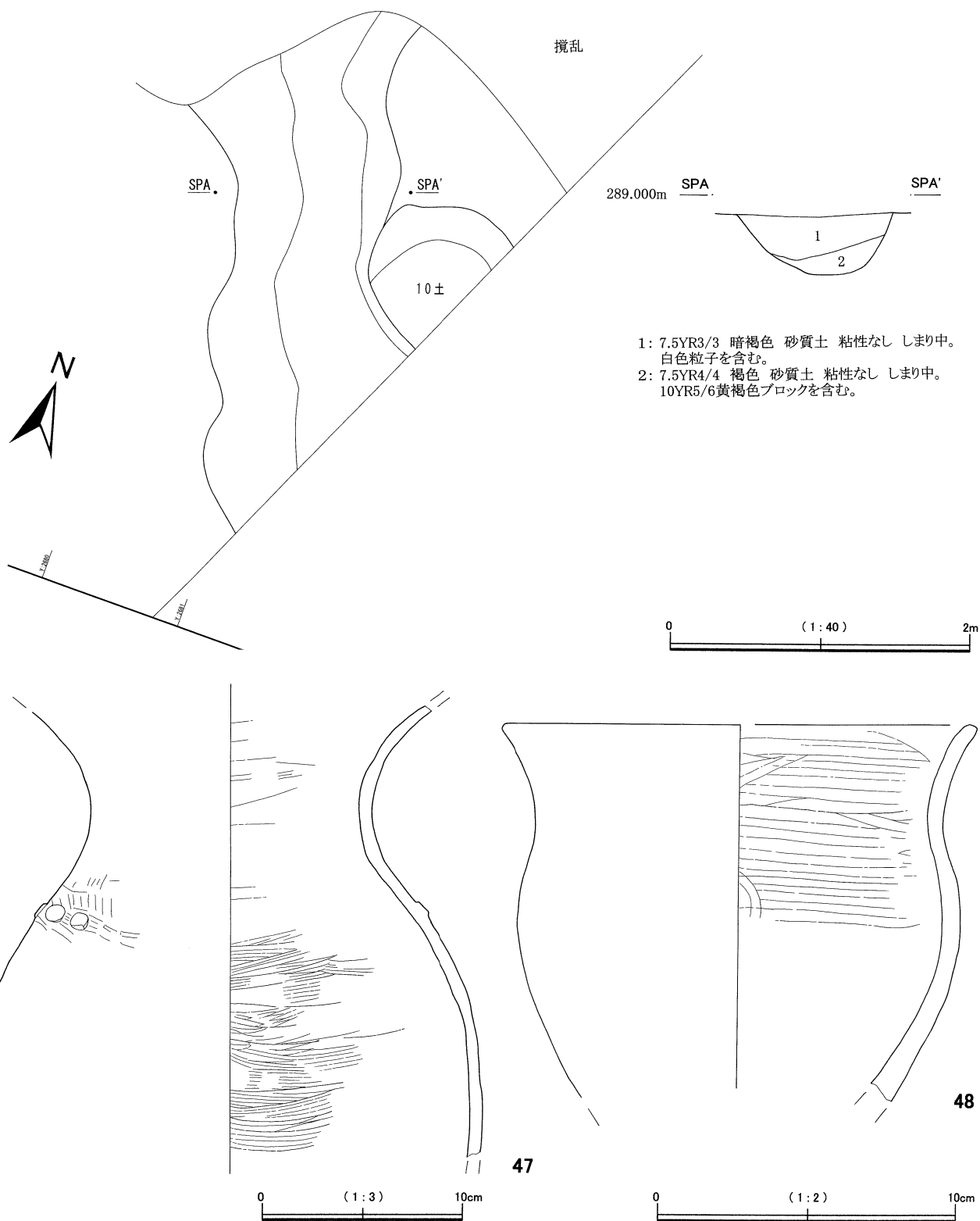


第3節 溝

2条の溝が確認できた。1号溝は、調査区南側に位置し、7・8号住居の北側、1・2・3ピットの南側にある。調査区東西に伸びる。長さおよそ350cm、幅24cm、深さ5cmとなっている。

2号溝は、1～5号住居の重複住居の北側に位置する。長さ260cm、幅100cm、深さ40cmのU字状の溝となっている。2号溝の北側部分は、攪乱によって遺構が壊されていた。また東側は調査区外となり、調査不可能であった。わずかな範囲での確認であったが、溝からは弥生時代の壺の破片（No.47）が確認できた。





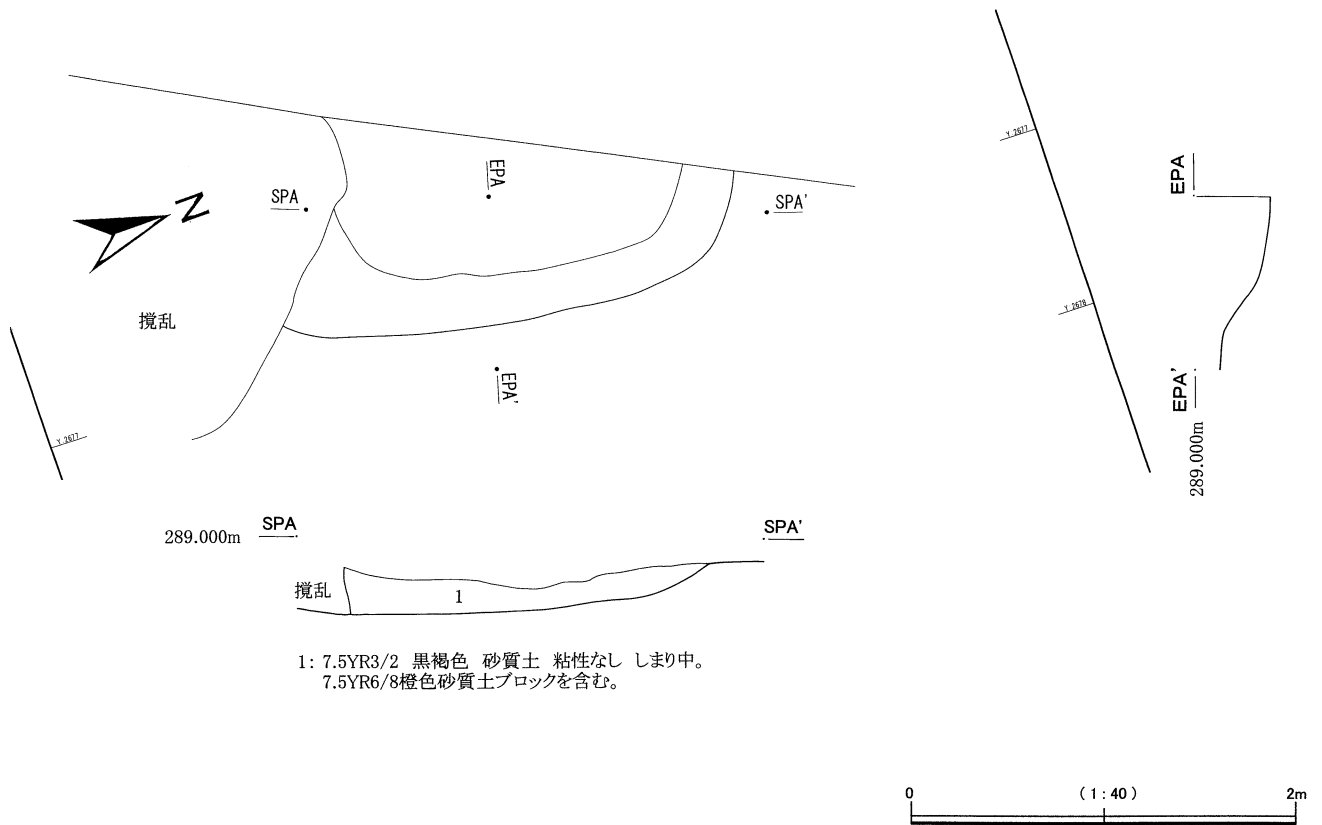
第24図 2号溝・出土遺物

第8表 2号溝出土遺物観察表

図版番号	注記番号	器種	器形	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調	胎土	焼成	文様・特徴	時代
47	F14-2ミゾP-4	弥生土器	壺				内面にふい黄橙 10YR7/3 外面赤褐5YR4/8 内面にふい黄褐 10YR6/3 外面橙5YR6/6	長石・雲母	良	肩部に直径8mmの円形貼付文あり 内面横方向ハケメ	3C末～4C前
48	F14-2ミゾ一括	土師器	小型甕	(16.0)		残12.8	内面にふい黄褐 10YR6/3 外面橙5YR6/6	長石・雲母	良	内面ミガキ 外面ナデ	

第4節 竪穴状遺構

調査区北側、住居密集地点より北側の西壁側に位置し、南北210cm、東西73cmを測る。遺構の南側は、攪乱によって壊されている。また調査区西壁があり、遺構の全貌を確認することはできなかった。遺物は、図示できるものはなかった。

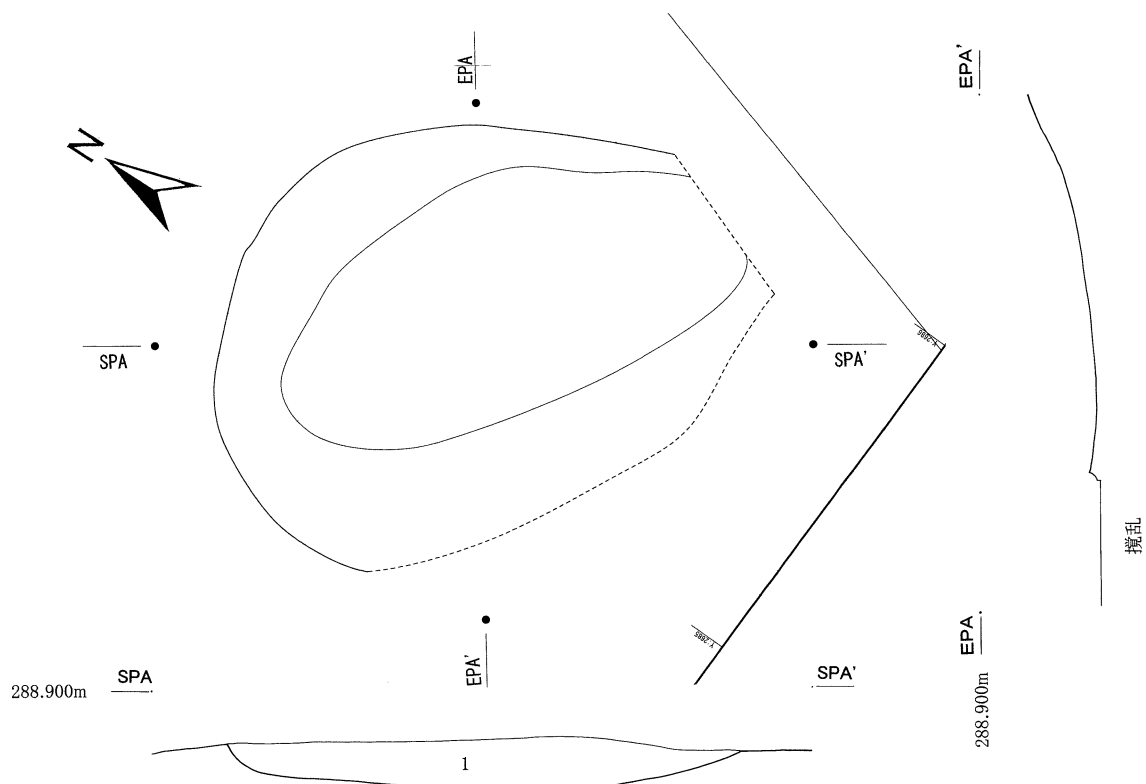


第25図 竪穴状遺構

第5節 土坑

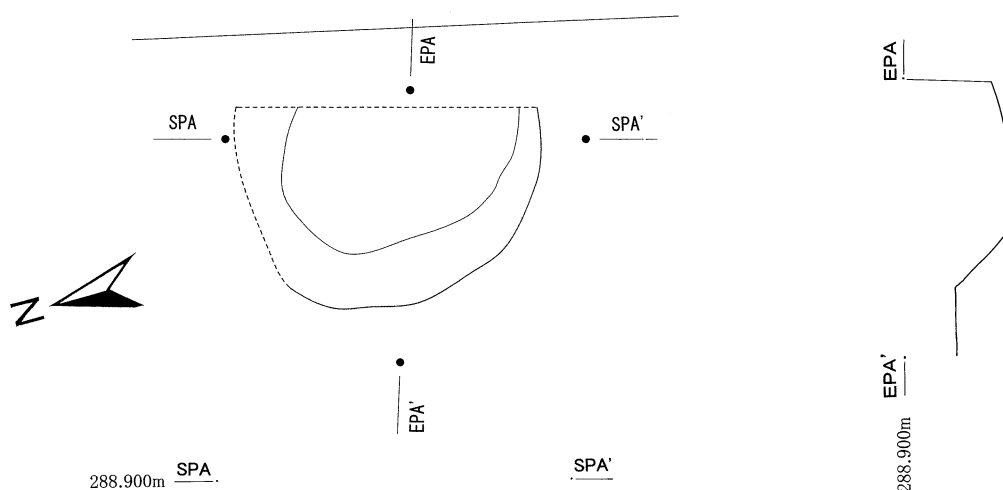
調査区から10基の土坑が確認できたが、そのほとんどが、調査区の壁に切られていたり、攪乱によって壊されていたり、遺構との重複関係にあったりと、土坑全体が確認できたものは、わずかであった。

その中でも5号土坑は、規模が大きく長軸は168cmとなる。土坑からは平安時代末、11世紀ごろの遺物が確認されている。また5号土坑の下からは、5号住居が確認されており、平安時代末の遺物が多く出土していることから、遺物は、5号住居に伴う可能性がある。



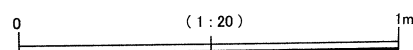
1: 5YR3/2 暗赤褐色 砂質土 粘性なし しまり中。
白色粒子を微量に含む。

1号土坑

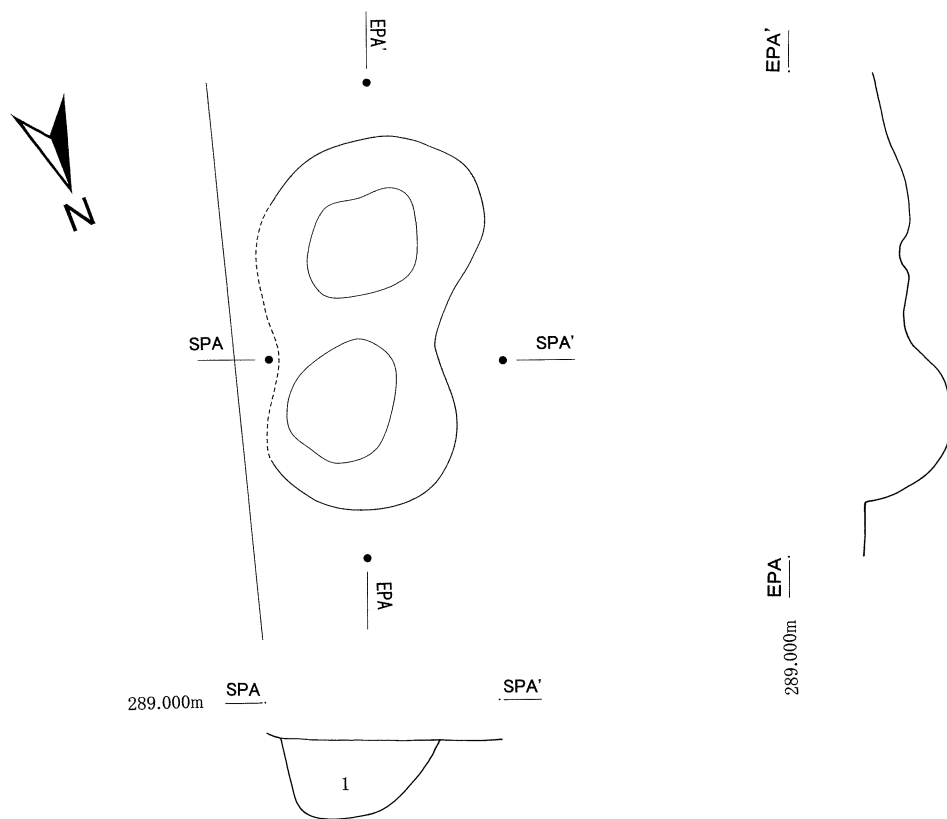


1: 5YR3/3 暗赤褐色 砂質土 粘性なし しまり中。
2mm程の白色粒子を含む。

2号土坑

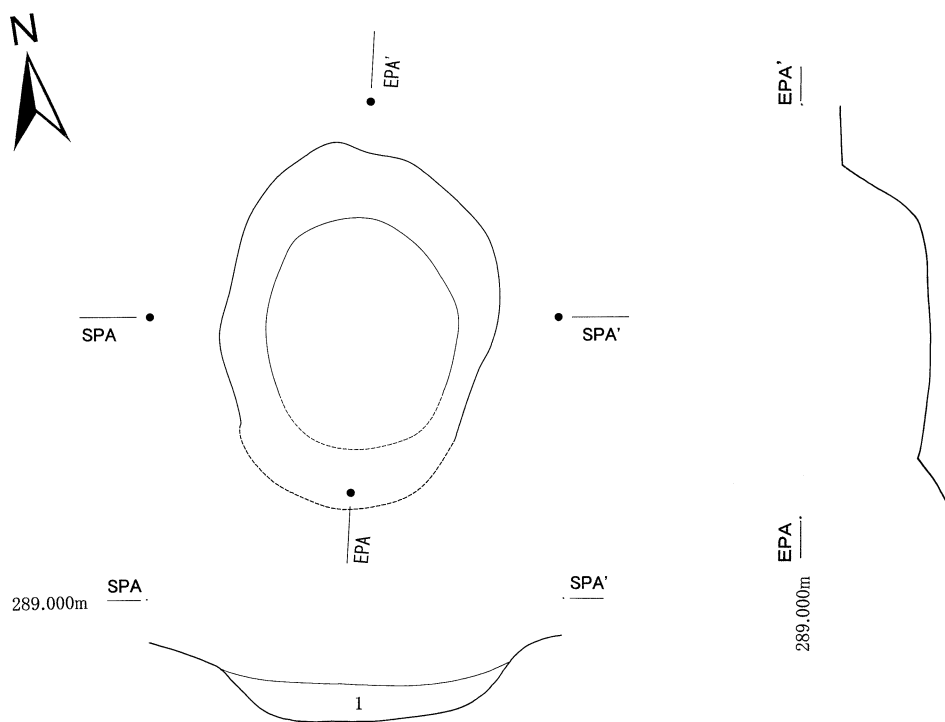


第26図 1・2号土坑



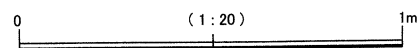
1: 5YR3/2 暗赤褐色 砂質土 粘性なし しまり中。
10YR5/8黄褐色ブロックを含む。

3号土坑

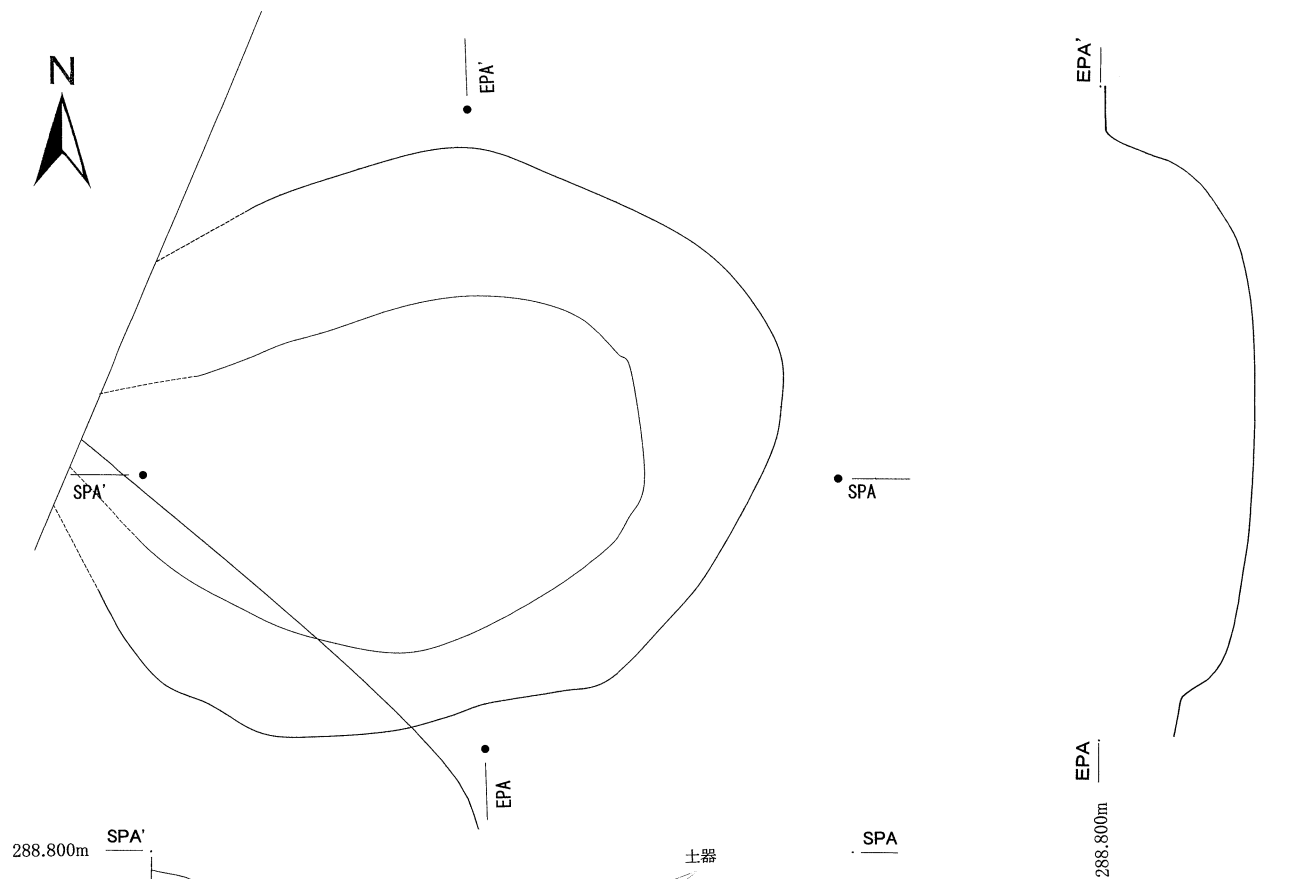


1: 7.5YR2/3 極暗褐色 砂質土 粘性なし しまり中。

4号土坑

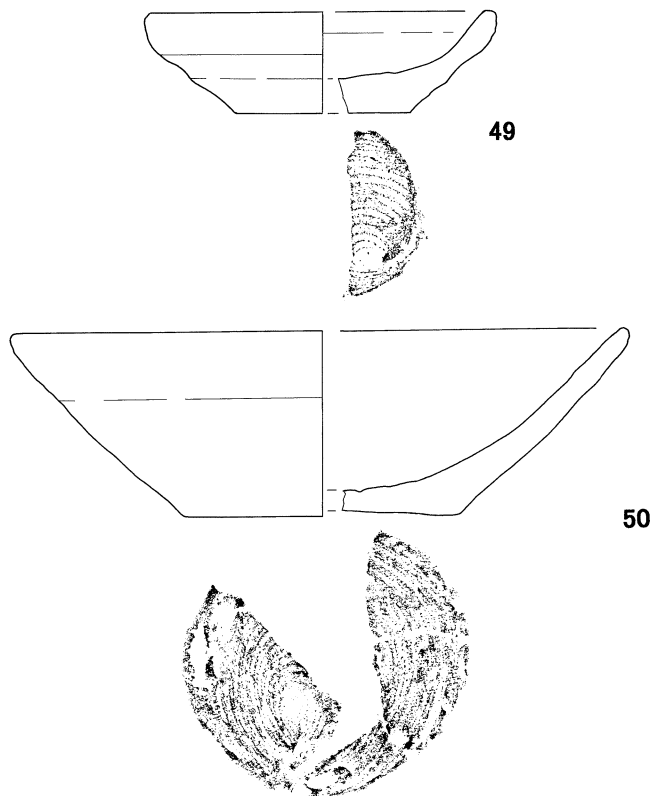
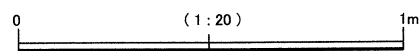


第27図 3・4号土坑



5号土坑

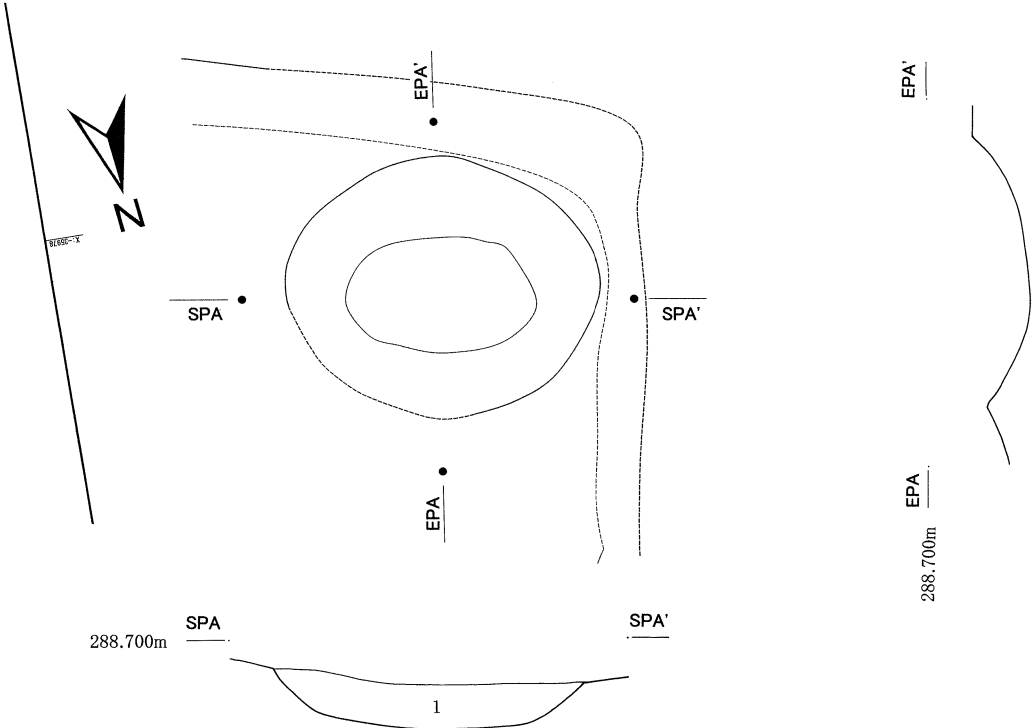
- 1: 10YR4/4 褐色 砂質土 粘性なし しまり中。
10cm程の円礫を含む。10YR6/8明黄褐色ブロックを含む。
- 2: 10YR2/3 黒褐色 砂質土 粘性なし しまり中。



第28図 5号土坑・出土遺物

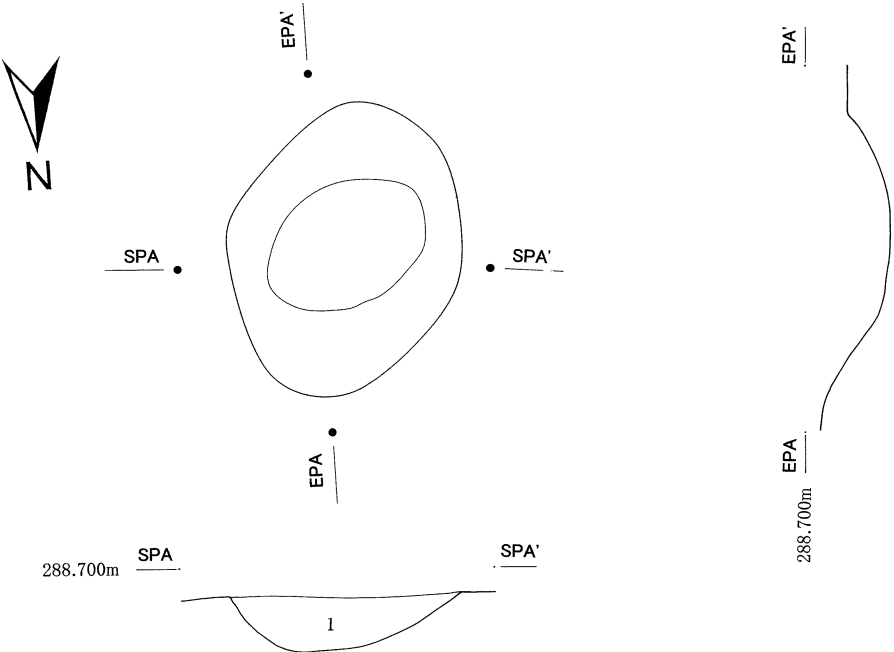
第9表 5号土坑出土遺物観察表

図版 番号	注記番号	器 種	器 形	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色 調	胎 土	焼成	文様・特徴	時 代
49	F14-5土一括	土師質土器	小皿	(9.0)	(4.4)	2.4	灰褐 5YR4/2	金雲母	良	底部糸切痕	11C末
50	F14-5土一括	土師質土器		(16.0)	(7.3)	4.9	黒褐 5YR3/1	金雲母	良	底部糸切痕	平安11C末
51	F14-5土一括		砥石	最大長 12.6	最大幅 1.8	最大厚 2.3					



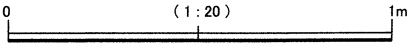
1: 7.5YR4/6 褐色 砂質土 粘性なし しまり中。
7.5YR5/8 明褐色砂質土粘性なし、しまり中のブロックを含む。

6号土坑

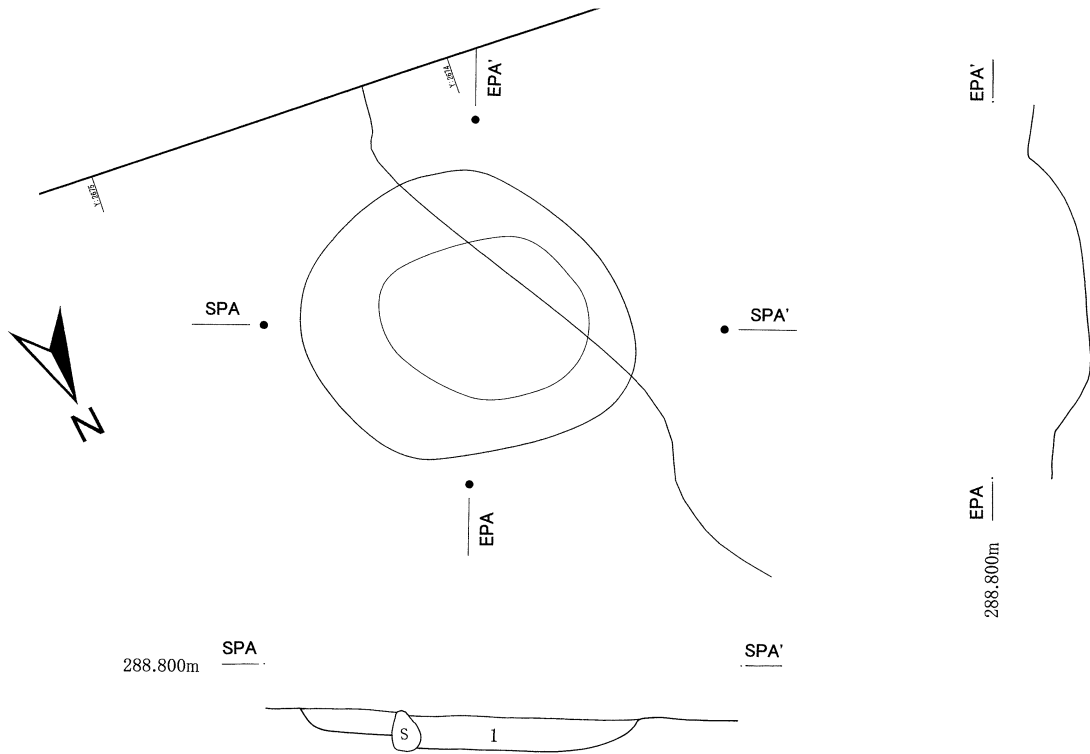


1: 10YR6/8 明黄褐色砂質土粘性なし、しまり中のブロックを含む。

7号土坑

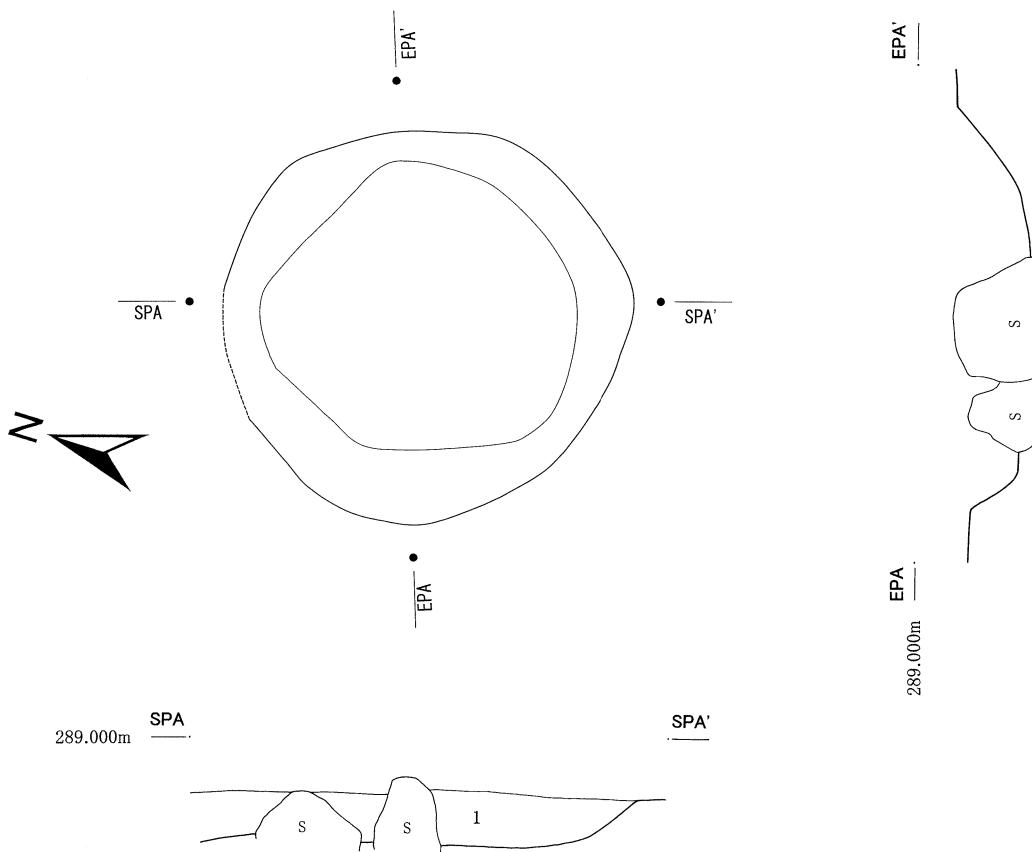


第29図 6・7号土坑



1: 10YR5/6 黄褐色 砂質土 粘性なし しまり中。
10YR6/8 明黄褐色砂質土ブロックを含む。

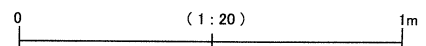
8号土坑

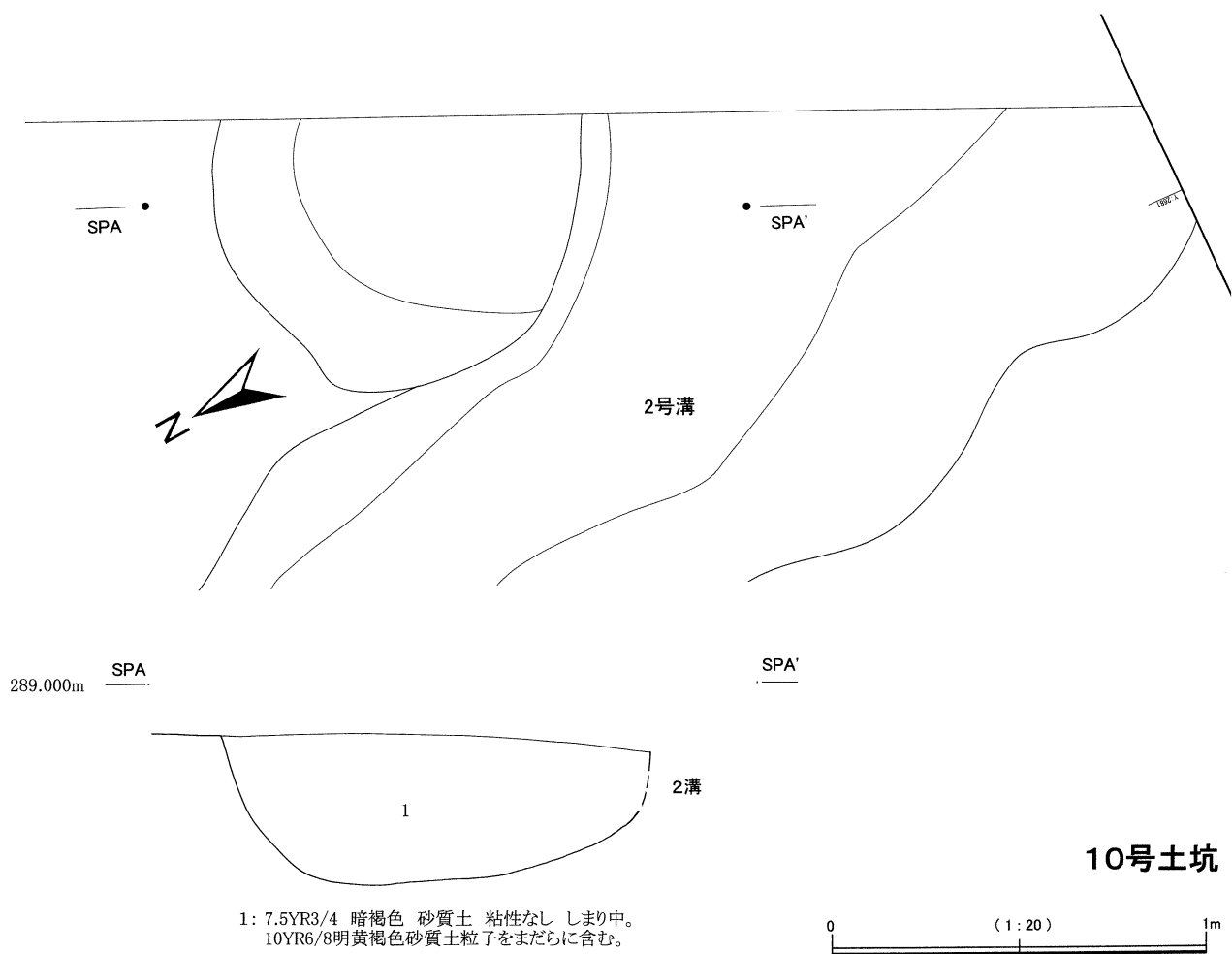


1: 7.5YR4/4 褐色 砂質土 粘性なし しまり中。
7.5YR6/8 明黄褐色ブロックを含む。20cm程の円礫を含む。

9号土坑

第30図 8・9号土坑





第31図 10号土坑

第10表 土坑一覧

(cm)

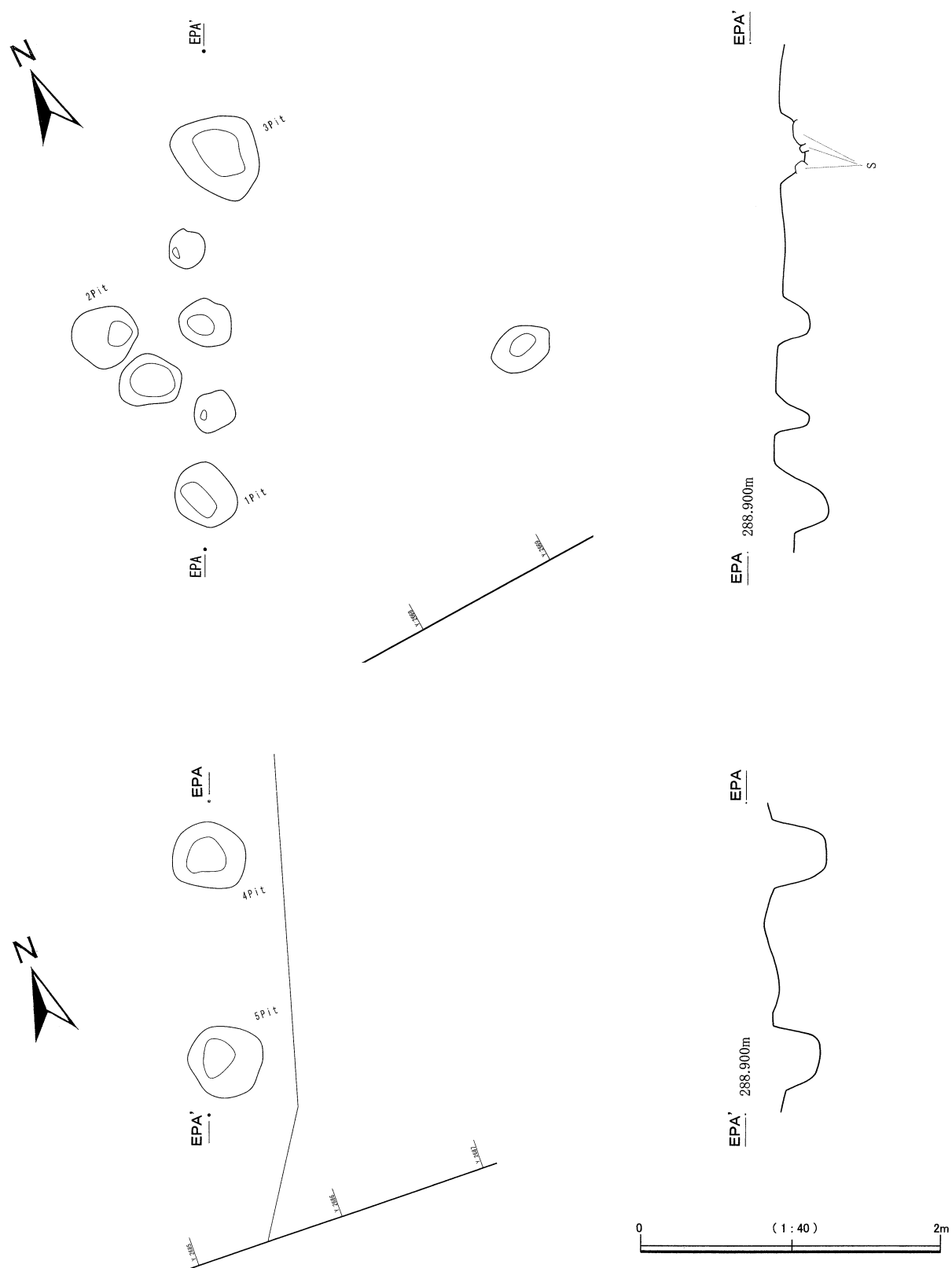
	形 状	長 軸	短 軸	深 さ	備 考
1 号土坑	橢円形	(135)	(11)	13	南側は攪乱
2 号土坑	円形?	(80)	(55)	15	東側は調査区外、北側は 3 号土坑と重なる
3 号土坑	橢円形	100	(40)	21	東側は調査区外
4 号土坑	橢円形	(78)	74	22	南側は攪乱
5 号土坑	橢円形	167	150	18	西側は調査区外
6 号土坑	橢円形	83	(71)	12	北東部分は遺構に切られている。3 号住居をきる。
7 号土坑	橢円形	75	63	14	
8 号土坑	橢円形	90	74	9	
9 号土坑	円形	(110)	108	14	北側は攪乱
10号土坑	橢円形?	(110)		40	東側は調査区外

※()内の数値は、残っている大きさ。

第6節 ピット

調査区1号溝の北側から、ピットが数箇所確認できた。ピット1・ピット2・ピット3からは遺物が確認できたが、極小で、実測に耐えるものではなかった。

また、調査区北側の10号住居南側から、2箇所のピット（ピット4・ピット5）が確認できた。



第32図 1～5ピット

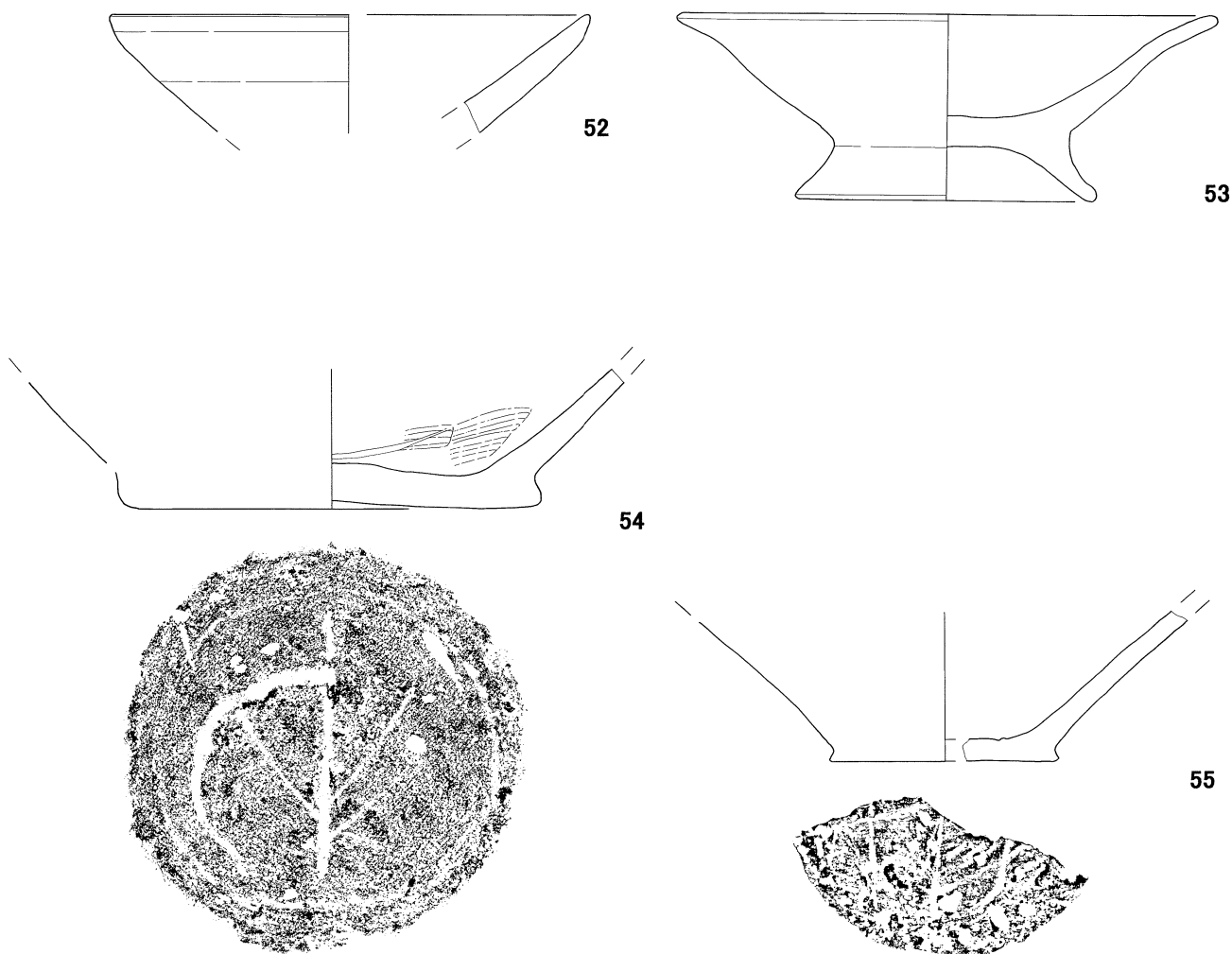
第7節 遺構外遺物

遺構外遺物は、古墳時代から平安時代末期の遺物が確認できた。

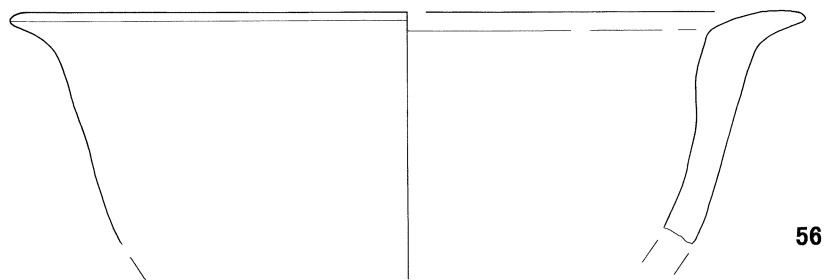
中でも調査区の南側にある旧河道の中から遺物が多く確認できた。旧河道は、空中撮影写真（図版1参照）からも見て取れるが、円礫や砂の層が広がっている。発掘調査場所周辺は、第1次調査・第2次調査・第10次調査と行われており、弥生時代から平安時代まで、数多くの遺物・遺構が確認されている。

旧河道中から発見したものは、上流からの流れ込みであると考えられる。また、注目すべきは、瓦の破片が出土していることである。破片の裏面は、布目がついている。

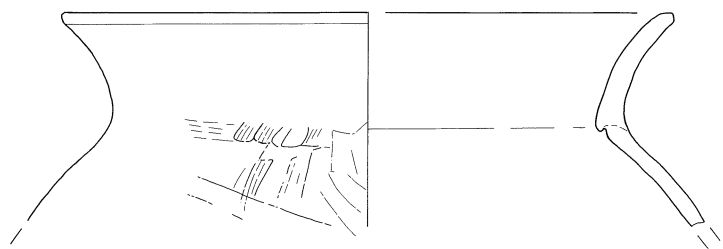
松ノ尾遺跡の過去の調査から、わずかであるが瓦の出土が見て取れる。本調査区の北側にあたる第10次調査からも破片が確認されている。第1次調査では、銅造仏形坐像が2躯確認されている。これらは、付近に瓦葺き建物があつた可能性が高い。



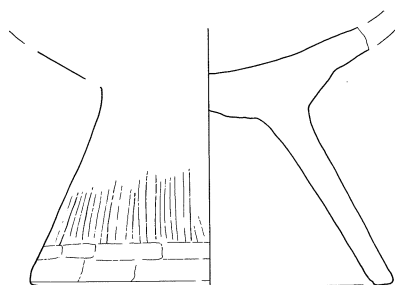
第33図 遺構外出土遺物（1）



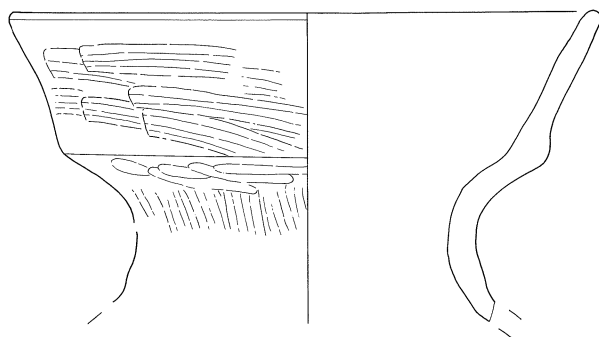
56



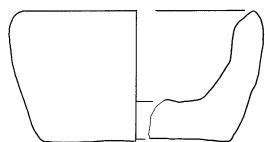
57



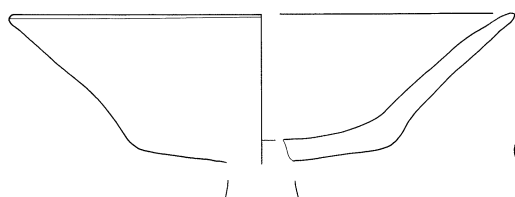
58



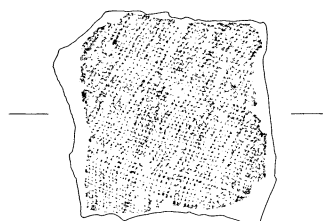
59



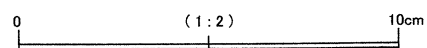
60



61



62



第34図 遺構外出土遺物 (2)

第11表 遺構外出土遺物観察表

図版 番号	注記番号	器 種	器 形	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色 調	胎 土	焼成	文様・特徴	時 代
52	F14-旧カドウ1 P-2	土師器	坏	(13.2)		残3.3	にぶい赤褐 5YR5/4	金雲母多量	良好		
53	F14-旧カドウ1 P-3	土師器	脚高高台坏	14.7	8.0	5.2	にぶい褐 7.5YR5/4	金雲母多量	良好	ロクロ回転右	
54	F14-旧カドウ2 P-8	土師器	壺底部		11.4	残3.9	橙5YR6/8	小石	良好	内面体部横方向ハケ メ 底部木葉痕	
55	F14-旧カドウ2 P-5 F14-旧カドウ2 P-7	土師器			(8.4)	残6.2	にぶい褐 7.5YR5/4	長石・石英	良好	底部木葉痕 内面横方向ハケメ	
56	F14-旧カドウ2 P-6	土師器	甕	(20.0)		残6.0	褐7.5YR4/6	長石・赤色粒 子	良	内外面ミガキ	
57	F14-旧カドウ2 P-2	土師器	甕	(16.0)		残5.5	黄褐 10YR5/8	長石・赤色粒 子	良	外面体部ハケメ	古墳6C3四半～
58	F14-旧カドウ2 P-1	土師器			8.8	残6.8	橙7.5YR6/6	長石・石英	良好	外面縦方向ハケメ	
59	F14-旧カドウ2 P-8	土師器	有段口縁壺	15.2		残8.2	橙5YR6/6	長石・石英・ 金雲母	良好	54と同一個体か？ 外面口辺部横方向ハ ケメ 外面頸部縦方向ハケ メ	
60	F14一括		ミニチュア土器	(6.0)	(5.0)	3.5	にぶい褐 7.5YR5/4	長石・石英	良好		
61	F14-旧カドウ 南一括	土師器	高坏	(13.2)		残3.9	にぶい褐 7.5YR5/4	赤色粒子	良好		
62	F14一括	瓦	女瓦	最大長 5.5	最大幅 5.0	最大厚 1.9	灰N6/	長石・石英		布目/平行叩目	

第3章 まとめ

平成16年度に3町が合併し甲斐市となってから、今回で8回目（双葉地区2件、敷島地区6件）の発掘調査となる。

松ノ尾遺跡は、甲斐市内の東側、荒川によって形成された扇状地と中央部に位置する丘陵地との間に形成された微高地にある。規模は、南北におよそ700m、東西に400mとなっている。松ノ尾遺跡内でも中央、東寄りに位置している。

今次調査区の北側は、10次調査区となっており、また北西には、現在、県指定文化財となっている「銅造仏形坐像」が出土した1次調査区がある。14次調査で確認した遺構は、古墳時代の住居4軒、平安時代の住居4軒、時期不明の住居2軒、土坑10基・溝2条・竪穴状遺構1箇所・ピット5箇所が確認された。

古墳時代…1・2号住居、(6号住居)、10号住居

平安時代末…3・4・5号住居、(9号住居)

時期不明…7・8号住居

今回の調査は、宅地造成に伴う調査であり、道路部分の調査のみであったため、およそ6m×50mの幅の細長いスペースでの調査であった。そのために、遺構の全貌を確認することがむずかしかった。

調査区は、試掘調査時では確認できなかったが、その1/4が重機などによる攪乱となっており、遺構が壊されていた。また、遺構密集地では最大5軒が重なる重複住居があり、古墳時代と平安時代の住居が重なっていた。10次調査区と隣接していることから、遺構の時期が重なる。

古墳時代の遺物としては、6号住居に見られるような、須恵器の蓋（No.32・33など）や9号住居出土の高坏（No.38・39）がみられる。

調査場所では、旧河道と思われる流路が、調査区の西から東にかけて、広い範囲でみることができた。

平安時代の遺物では、5号住居から小皿が確認され、11世紀末の遺物も多く出土している。

特質すべきものとしては、遺構外であるが、瓦の破片（No.62）が確認できたことである。10次調査でも瓦の破片が確認されている。また、1次調査区からは、「銅造仏形坐像」の出土もみられることから、仏教に関する施設が、付近にあったのではないかと推測できる。

松ノ尾遺跡での調査は、14回目となる。少しずつではあるが、松ノ尾遺跡の様子がわかりつつある。

出土遺物や遺構の内容から考えると、縄文・弥生・古墳・平安時代を通して、松ノ尾遺跡は、居住地域となっていた。そして、古墳時代から平安時代にかけて、隆盛を迎える。具体的な遺構は、確認されていないが、瓦の破片の出土や平安時代の「銅造仏形坐像」の出土から、付近には寺院建築があった可能性も考えられる。

参考文献

山梨県 平成10年『山梨県史 資料編1 原始・古代1』

山梨県 平成11年『山梨県史 資料編2 原始・古代2』

三輪孝幸・大嶋正之 2006『松ノ尾遺跡X』甲斐市教育委員会

写真図版



図版 1 - 1 調査区全景



图版 2



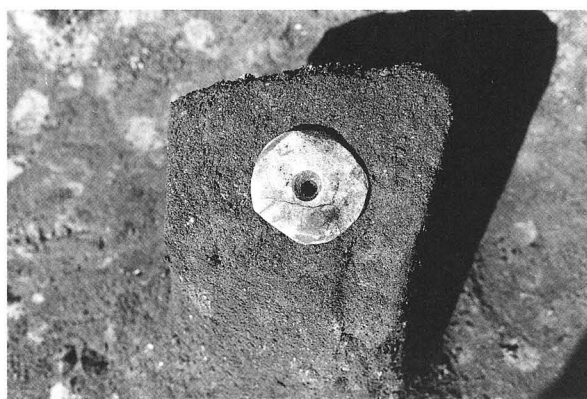
1 重複住居



2 1号住居跡



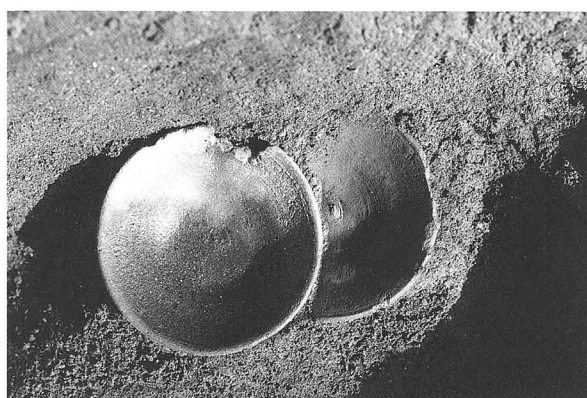
3 2号住居跡



4 2号住居跡 遺物出土状況



5 3号住居跡



6 3号住居跡 遺物出土状況



7 4号住居跡



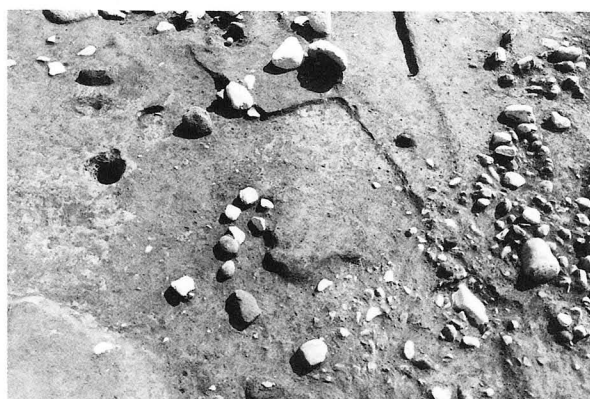
8 4号住居跡 遺物出土状況



1 3・4号住居跡 重複ライン



2 3・4号住居跡 遺物出土状況



3 5号住居跡



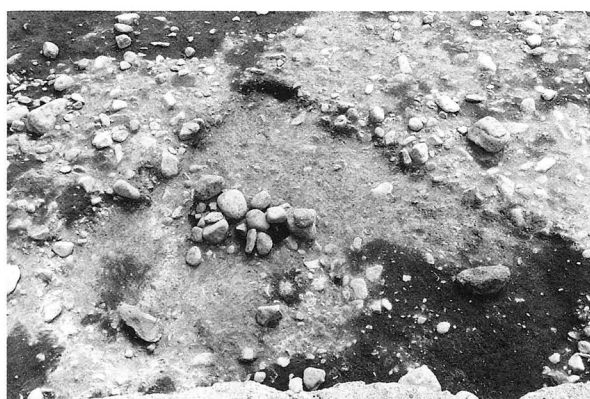
4 5号住居跡 遺物出土状況



5 6号住居跡



6 7・8号住居跡



7 9号住居跡

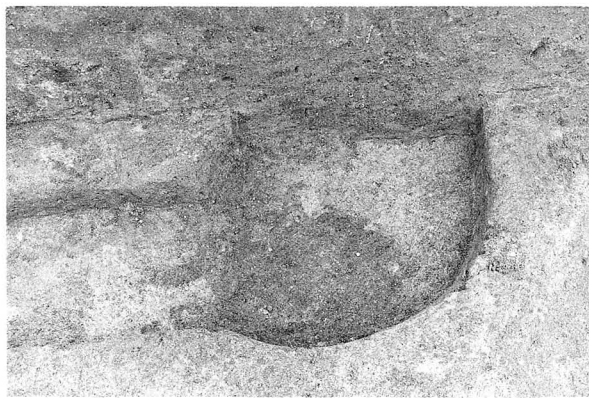


8 10号住居跡



1

1 号土坑



2

2 号土坑



3

3 号土坑



4

4 号土坑



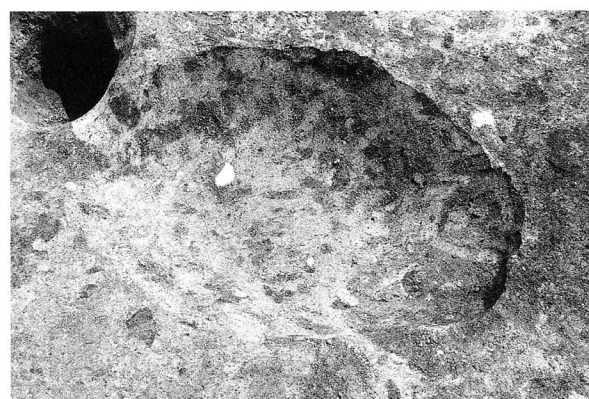
5

5 号土坑



6

6 号土坑



7

7 号土坑

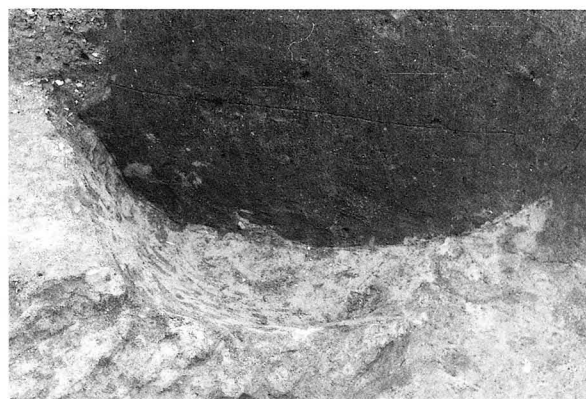


8

8 号土坑



1 9号土坑



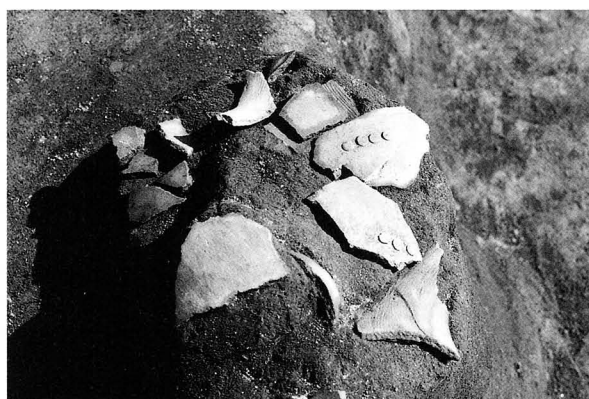
2 10号土坑



3 1号溝



4 2号溝



5 2号溝遺物出土状況



6 ピット群



1



3



4



5



6



7



8



9



10



11



12



17



21



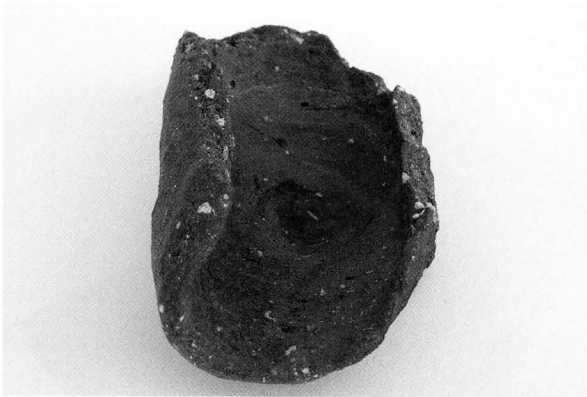
20



22



23



25



26



34



36



37



43



45



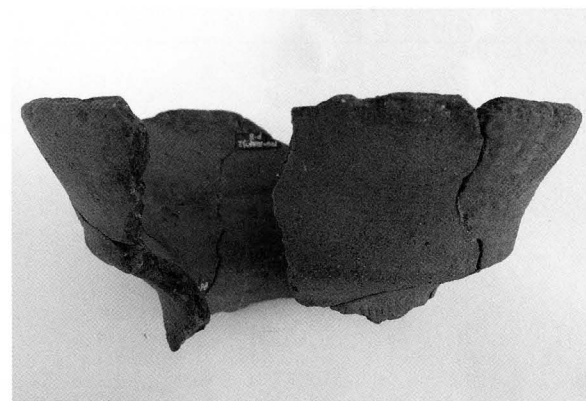
47



48



53



59



54

報 告 書 抄 録

ふ り が な	まつのおいせき							
書 名	松ノ尾遺跡14							
副 書 名	宅地造成工事に伴う古墳時代・平安時代の発掘調査報告書							
巻 次								
シ リ ー ズ 名	甲斐市文化財調査報告書							
シリーズ番号	19							
編 著 者 名	須長 愛子							
編 集 機 関	甲斐市教育委員会							
所 在 地	〒400-0192 山梨県甲斐市篠原2610							
発 行 年 月 日	平成24年 [西暦2012年] 3月30日							
ふ り が な 所 収 遺 跡 名	所 在 地	コ ー ド		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	度分秒	度分秒			
まつのおいせき 松ノ尾遺跡	山梨県 甲斐市大下条45 外	19210	敷-18	35度40分 31秒	138度31分 46秒	平成22年 1月19日 ～ 平成22年 3月31日	337㎡	宅地造成
所 収 遺 跡 名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
松ノ尾遺跡	集落跡	古墳・平安	住居跡 竪穴状遺構 土坑 溝	弥生土器 土師器 須恵器	遺構外から布目瓦の破片出土			

甲斐市文化財調査報告 第19集

松 ノ 尾 遺 跡 14

発 行 日 平成24年（2012年）3月30日
 発 行 甲斐市教育委員会
 山梨県甲斐市篠原2610
 TEL (055) 278-1697
 印 刷 株式会社 少 國 民 社

